

イヴァン雷帝とクールプスキー公の往復書簡試訳 (I)

栗生沢 猛 夫

1564年4月30日夜、イヴァン雷帝の信頼する友であり、モスクワ国家の指導的政治家またすぐれた武人であった貴族アンドレイ・ミハーイロヴィチ・クールプスキー公(1528—83)は、ユーリエフ(デルプト、現タルトゥ)の町を出奔し、ポーランド・リトワ領リヴォニアへと亡命した¹⁾。今日広く信じられているところによれば、出奔後彼はリヴォニアの町ヴォルメル(現ヴァルミエラ)からイヴァン雷帝の圧政を非難し、亡命を正当化する書簡を書き送った。クールプスキーの亡命と書簡は雷帝に激しい衝撃を与えた。雷帝は直ちに反論した。かくて始められた往復書簡は雷帝とその治世を理解するための最も重要な史料であるばかりでなく、第一級の文学的遺産ともなった。

往復書簡は今日、クールプスキーからの三通と雷帝からの二通の合計五書簡からなると考えられている²⁾。

クールプスキーはヴォルメル到着後間もなく雷帝にあてて最初の書簡を執筆する。この書簡がいかにして雷帝の許に届けられたのか(あるいは彼の目に

1) Полное собрание русских летописей. т. XIII. 2-я половина. СПб., 1906 (=M. 1965), стр. 383.

2) K. Stählin の後に掲げる独訳では、クールプスキーの第三書簡は三分され、全七通からなるものと考えられている。J. L. I. Fennell の英訳もこの立場に立っている。クールプスキーの著作集の最初の校訂者 Н. Г. Устрялов (後述) はクールプスキー第三書簡を二つの独立の書簡であると考えている。本稿は後述の Г. З. Кунцевич や1979年版の校訂者(Ю. Д. Рыков) に従ってクールプスキー第三書簡を単一の書簡と考える。см. Переписка Ивана Грозного с Андреем Курбским. Текст подготовили Я. С. Лурье и Ю. Д. Рыков. Под ред. Д. С. Лихачева, Л. 1979 (以下 Переписка と略記) стр. 298-299.

3) クールプスキーが正確にいつ第一書簡を執筆したかは不明である。雷帝の返書の日付が7月5日となっているから、逃亡直後(従って5月初旬)であることは間違いないが、国境を越えた翌日とするスクルィンニコフの見解は物理的に不可能であろう。см. Р. Г. Скрынников, Переписка Грозного и Курбского. Парадоксы

触れるにいたったのか)は不明であるが⁴⁾、いずれにせよ雷帝は即座に返書の執筆に着手したと考えられる。彼がその長大な書簡を完成させたのは7月5日のことであった⁵⁾。雷帝からの返書を受け取ったクールプスキーは、おそらくは数年のうちに、「大仰で騒々しい書簡」⁶⁾に対する抑制のきいた、短い、だが侮蔑的な返書(クールプスキー第二書簡)を執筆した⁷⁾が、これは発送されなかった⁸⁾。他方雷帝は13年後の1577年夏自らが率いるロシア軍がヴォルメルを占領したときに、かつてクールプスキーがこの地から不遜なる書簡を送りつけてきたことを思い起し、再びクールプスキーにたいし、神は自分とともに

Эдварда Кинана. Л. 1973 (以下 Скрынников, Переписка と略記) стр. 60. これに対する E. L. Keenan の批判 (《Kritika》 vol. X, no 1, Fall 1973, pp. 26-28) をも参照。

- 4) クールプスキー第一書簡が彼の従僕ヴァシーリー(ヴァシカないしヴァスカ)・シバーノフによってクレムリンの赤の階段において雷帝に直接手渡されたとする後期(17世紀末)の年代記(いわゆる Латухинская Степенная книга)の記述は、□ □ ルリエーや P. Г. スクルィンニコフによれば、伝説にすぎない。ルリエーとスクルィンニコフはクールプスキー第一書簡がいかにして雷帝に知られるにいたったか(ないしはリトワとモスクワ間の交信一般のあり方)について、それぞれ独自の仮説を提唱している。см. Послания Ивана Грозного. Подготовка текста Д. С. Лихачева и Я. С. Лурье. Под ред. А. П. Адриановой-Перетц. М. -Л. 1951 (以下 Послания Грозного と略記) стр. 472-473; Переписка, стр. 220-224, 381-382; Я. С. Лурье. Первое послание Ивана Грозного Курбскому, 《Труды отдела древнерусской литературы》 т. XXXI (1976) стр. 230-231; Скрынников, Переписка. стр. 92-94; А. А. Зимин. Первое послание Курбского Ивану Грозному и Василий Шибанов, в кн.: Культурное наследие древней Руси. М., 1976, стр. 142-147. さらに後述 125-126ページ, 注25をも参照。
- 5) この日付は雷帝第一書簡の末尾に明記されている。см. Переписка, стр. 52.
- 6) Переписка. стр. 101.
- 7) 執筆の正確な日付は不明である。Stählin (下記訳書, S. 162) は1565年以降とするのみであるが、最近アメリカの研究者 H. グレアムは1569-1570年とする説を提唱している。X. Ф. Грехем, Вновь о переписке Грозного и Курбского. 《Вопросы Истории》 1984, №. 5. стр. 174-175.
- 8) その理由をクールプスキー自身が後に第三書簡のなかで次のように記している。「わたしも大分以前に、汝の大仰な書簡に答えておいた。ただそれを御地の不名誉な慣習のゆえに送り届けることができなかった。というのも汝がロシア王国を閉鎖してしまったからである。それにより汝は人間の自由な本性をあたかも地獄の要害に閉じこめたかの如くであった。」(Переписка, стр. 110).

あることを高らかに宣言する書簡を書いた（イヴァン第二書簡）。⁹⁾ この書簡はロシア軍の捕虜となり、雷帝により釈放されたリトワの軍司令官A・ポルベンスキー公に託されてクールプスキーの許に届けられた。クールプスキーはこれを読み、さらに反論（クールプスキー第三書簡）を書いた。それは最終的には1579年9月15日に書きあげられた¹⁰⁾。クールプスキーはこれを、先の第二書簡とともに雷帝に送ったが¹¹⁾、これが雷帝の許に確かに届いたかどうかは定かでない。いずれにせよ雷帝はもはやこれには答えず¹²⁾、またクールプスキーもこれ以上論争の継続を望まず¹³⁾、書簡の往復はこれで終わってしまう。

- 9) 末尾に1577年とあるが日付はない。1577年のロシア軍の大攻勢の最中に雷帝は自らが占領したリヴォニア諸都市から、各方面に戦果を誇示する書簡を多数執筆した。雷帝のクールプスキーあて第二書簡もその一つであった。これについては *Послания Грозного*, стр. 501-512 また *Переписка*, стр. 241. をみよ。
- 10) この書簡には主文 (*Переписка*, стр. 106-113) に続いて二篇の追伸ないし付記があり (*Там же*, стр. 113-116, 116-118) それぞれの末尾に1579年9月3日と9月15日の日付がある。(この二篇の付記を K. シュテーリンや J. L. I. フェネルらは独立の書簡とみなすわけである。) 主文の執筆時期は *Переписка* の校訂者 (Ю. Д. リニコフ) によれば、1577-1578年 (1577年の秋以降間もなく、ないしは1579年8月31日 [ポロツク占領の日] の1~2年前) である。 см. *Переписка*, стр. 299 これに対し同じ *Переписка*, стр. 243 で Я. С. ルリエーは本書簡の執筆時期を1578年以降としている。他方グレアムは主文も1579年に執筆されたと考える。Грехем, *Вновь о переписке*, стр. 176.
- 11) スクリンニコフやリニコフは、クールプスキーがこのとき、すでに13年前に執筆していた第二書簡に一部加筆した、と考える。С. О. シュミットにいたっては、まったく書き直した、とする。グレアムはこれを批判している。Скрынников, *Переписка*, стр. 96; *Переписка*, стр. 297-298; С. О. Шмидт, *К истории переписки Курбского и Ивана Грозного*. в кн.: *Культурное наследие* (注4) стр. 147-151; Грехем, *Вновь о переписке*, стр. 175.
- 12) スクリンニコフは雷帝がこの頃軍事的敗北や家庭内の混乱等によって意気消沈し、もはや答える気力を失っていた、とする (Скрынников, *Переписка*, стр. 96) が、リニコフはクールプスキーが第二、第三書簡をそもそも発送しなかった (かつて第二書簡を発送しなかったのと同じ理由から) 可能性があると考えている。いずれにせよ、雷帝がこれらを受けとったという証拠はない。リニコフによれば、クールプスキーの第二、第三書簡が、ロシアの写本伝統のなかで知られるようになったのは17世紀70年代になってからのことである。もし雷帝が実際に受けとっていたなら、彼は性格的に、加えられた侮辱に断呼反撃したであろう、という。 (*Переписка*, стр. 300)
- 13) クールプスキーは第三書簡に次のように記している。「これ以上異国にいる家臣に書こうなどとは思わないでいただきたい。ことにここ [ポーランド——訳者注] で

かくして往復書簡は次の順序で執筆されたことになる。①クールプスキー第一書簡（1564年5月初旬） ②イヴァン雷帝第一書簡（1564年7月5日） ③クールプスキー第二書簡（②の後数年のうちに。1569～70年か？ただしすぐには発送されず。） ④イヴァン第二書簡（1577年） ⑤クールプスキー第三書簡（1579年9月15日脱稿，クールプスキー第二書簡とともに発送される？）

本稿はこれら五書簡を順次翻訳しようとする試みである。

底本に用いたのはソ連邦科学アカデミーの『文学記念碑』 Литературные памятники 叢書の一冊として1979年に Я. С. ルリエーと Ю. Д. リコフによって校訂，刊行されたテキスト，『往復書簡』 Переписка（注2参照）7-9, 12-52, 101-102, 103-105, 106-118 ページである。

今日雷帝とクールプスキーの往復書簡集は，原本はおろか，同時代（16世紀）の写本も伝わっていない¹⁴⁾。その存在に言及する同時代史料もほとんど知られていない。このような事情から，往復書簡を後代の偽作と考える研究者もいる¹⁵⁾。だが16世紀の写本が伝わらないのは，当時の困難な情況（クリミア・タ

は皆答える術を知っているのだから……」（Переписка, стр. 110）。

14) これについては Переписка, стр. 250-351 のリコフ及びルリエーによる古文獻学的検討を参照されたい。

15) その代表はアメリカの研究者 E. L. キーナンであろう。彼は1971年に，現存する諸写本の綿密な検討を通じて，クールプスキー第一書簡が半世紀以上も後の1623-25年に，С. И. シャホフスコイ公によって（ツァーリ・ミハイールにあてて）書かれ，後に彼自身によってクールプスキーのものとしてされた文書である，とする見解を発表した。キーナンは「クールプスキー第一書簡」の分析に全精力を傾けているが，「往復書簡」のその後の展開についても一応の見通しはつけている。それによると，シャホフスコイが，ミハイール帝とその父フィラレート総主教による彼の一族にたいする迫害を非難する「クールプスキー第一書簡」を書いた後の17世紀20年代末～30年代初頭に，同じシャホフスコイないし彼に近い他の人物が「イヴァン第一書簡」を書いた。この書簡にはミハイール帝期の政治情勢がよく描かれており，とくにフィラレートの役割にたいする批判が隠されている。その後しばらくして，アレクセイ帝期（1645-76）の晩年，高級官僚の一人でアレクセイ帝と専制の支持者（А. С. マトヴェーエフか？）が「イヴァン第一書簡」（の詳細版）の摘要（a paraphrastic synopsis）を作成した。これが「イヴァン第二書簡」であるが，これはおそらく「クールプスキー第二書簡」より以前に書かれた。その後間もなく，今度は，同じ高級官僚層のなかで，反専制，反ロマノフ朝的見解をもつある人物（B. B. ゴリーツィンないしそのグループの一人）が「クールプスキー第二書簡」及び「クールプスキー第三書簡（の主文）」として知られているものを執筆

タール軍によるモスクワの破壊、モスクワの度重なる火災炎上、動乱期の混乱…）から止むをえぬものであって、それはむしろ当時としては一般的であった。また雷帝のクールプスキーあて書簡が、確実に彼のものと考えられる他の書簡と文体、内容、論理構造等の点で似ていることも指摘されている¹⁶⁾。最近では16世紀の史料のなかに往復書簡の存在を推測せしむるもののあることも知られるようになった¹⁷⁾。こうしたことから、本稿の筆者も、少くとも雷帝とクールプスキーの間に書簡を通じての論争が行われたことは間違いない（それが今日知られている形においてであったかどうかはともかくとして）と考えるにいたっている。

雷帝とクールプスキーの書簡や諸著作は17世紀20年代以降の個々の写本においてまた諸集成の一部として伝わっている。もっとも五書簡が一つの形にまとめられたのは19世紀に入ってからのことである。

往復書簡は1833年初めてクールプスキー著作集の一部として Н. Г. Ус

した……………（E. L. Keenan, *The Kurbskii-Groznyi Apocrypha. The Seventeenth-Century Genesis of the "Correspondence" Attributed to Prince A. M. Kurbskii and Tsar Ivan IV.* Cambridge, Mass., 1971）

キーナンの「往復書簡」偽作説はその後欧米の学界で活発な論争をひきおこした（今日までに、これを論評し、批判しあるいは評価した論稿は、その後のキーナンの反論や研究も含めて、50点以上になっている）。ことにソヴェトの研究者はこれに強く反発している。なかでもスクリニコフはキーナンの上掲書を批判するために、特別の一書を著わしたほどである。（上掲 *Скрынников, Переписка*）今日キーナン説を受けいれる研究者は少数（たとえば D. Ostrowski など cf. *«Kritica»* XVII-1 (1981) pp. 1-17; *«Russian History»* 9, pt. 1 (1982), pp. 121-126) であるが、彼により提起された諸問題のなかには未解決の点がまだ依然として残っており、彼の研究で「往復書簡」をはじめとする雷帝、クールプスキー研究が各方面に深められたことは否定できない。本稿の底本として利用される上記 *Переписка* の出版自体がキーナンの問題提起と無関係ではなかったと考えられるのである。

16) これについてはとくに Д. С. Рихачёв の論稿を参照（*Послания Грозного*, стр. 452-467; *Переписка*, стр. 183-202）。

17) これについては *Скрынников, Переписка*, стр. 88 сл.; Д. Уо, *Неизвестный памятник древнерусской литературы. в кн.: Археографический ежегодник (以下 АЕ) за 1971 год*, М., 1972, стр. 357-361; Б. Н. Флоря, *Новое о Грозном и Курбском. «История СССР»* 1974, №. 3, стр. 142-145; Л. А. Юзефович, *Стефан Баторий о переписке Ивана Грозного и Курбского*, АЕ за

トリャーロフによって出版された。(Устрялов Н. Г. Сказания князя Курбского. ч. 1-2. СПб., 1833. これはさらに1842年第二版, 1868年第三版と版を重ねている。第三版の стр. 131 以下を参照。)

それはまた1914年にも, 同じくクールプスキー著作集の一部として Г. З. Кунцевич によって新たに刊行された。(Сочинения князя Курбского. Том первый. Сочинения оригинальные. =Русская историческая бивблиотека, т. XXXI, СПб. 1914. стр. 1-160)

だが五書簡ではなくとも, クールプスキーの三書簡と雷帝の第一書簡との結びつきは, すでに最古の写本にみられる。雷帝の第二書簡がクールプスキーの書簡と結びつけられるのは18世紀になってからのことである。

1951年には Д. С. リハチョフと Я. С. ルリエーの校訂で『雷帝書簡集』Послания Грозного (注4)が『文学記念碑』叢書の一冊として出版された。これは雷帝の著作集刊行の試みとしては最初のものである。これにはもちろん雷帝がクールプスキーにあてた二通も含まれているが(とくに第一書簡は新たに発見されたより古い写本によって刊行された), 付録(534-536ページ)にはクールプスキーの第一書簡も(上と同じ写本によって)印刷されている。

本稿が底本として利用する『往復書簡』Переписка はとくに往復書簡のテキストの校訂と刊行を目的としたものである。以前の刊本に比し, より多くの写本に基づき, 徹底したテキスト批判が行われている。テキストの校訂は, クールプスキー書簡の場合は А. А. ジミン (ただし第一書簡第一版についてのみ)と Ю. Д. ルィコフ, 雷帝書簡の場合は Я. С. ルリエーが行っている。

本往復書簡はすでに1921年に独語訳が出たのを皮切りに, 英語, チェコ語, デンマーク語, 仏語, イタリア語の翻訳が現われている。

本稿は『往復書簡』119-180ページの現代ロシア語訳(クールプスキー書簡は О. В. トヴォーロゴフ訳, 雷帝書簡は Я. С. ルリエーと О. В. トヴォーロゴフの共訳)¹⁸⁾とともに次の各国語訳を参照した。

1974 г. М., 1975, стр. 143-144 を参照されたい。

18) 雷帝(のクールプスキー宛)書簡の現代ロシア語訳は Послания, Грозного, стр. 283-328, 385-388 においてもなされている。(いずれも Я. С. Лурье による。)

Der Briefwechsel Iwans des Schrecklichen mit dem Fürsten Kurbskij (1564-1579). Eingeleitet und aus dem Altrussischen übertragen von K. Stählin, Leipzig 1921 (以下 Stählin と略記) (これはただし Устрялов と Кунцевич のテキストの訳である。)

The Correspondence between Prince A. M. Kurbsky and Tsar Ivan IV of Russia, 1564-1579. Edited with a Translation and notes by J. L. I. Fennell, Cambridge 1955 (以下 Fennell として利用)

Ivan IV, dit le Terrible, Tsar de Russie. [Correspondance avec le prince Kourbski, Epitres] Traduit par D. Olivier, Paris 1959.

訳注も『往復書簡』をはじめ、おおむねすでに掲げた諸書を参考にしている¹⁹⁾。それゆえ一々典拠は記さない。

訳文中 () は原文, [] は訳者の挿入である。

固有名詞の表記はおおむね原語に忠実に従うが、聖書及びローマ・ビザンツ史上の地名・人名については、むしろ一般に知られている形で行った。

訳注における聖書の関連箇所への指示は、日本聖書協会発行の現行の聖書（の章分け）に従って行った。ただし訳文そのものは必ずしもそれに一致していない。

旧約外典については、日本聖書学研究所編『聖書外典偽典』（2, 旧約外典 II）（教文館 1977年）を参考にした²⁰⁾。

ただし聖書の引用部分などは訳されていない。) 上述の如く Переписка における場合と底本が異なっているが、こちらにも必要に応じて参考にした。

19) 他にとくに А. А. Зимин の二書 (Реформы Ивана Грозного, М., 1960; Опричнина Ивана Грозного, М., 1964) を参照にした。

20) なお佐々木秀夫、岡本哲也両氏が雷帝第一書簡 (Послания Грозного 所載テキスト) の電算機による言語学的分析を試みておられることを付記しておく (「イワンIV世雷帝がA. クールプスキーに与えた1564年の書簡。電算機によるその分析と総合」, 『愛知大文学論叢』第56・57輯 (昭51年) ——)。『往復書簡』の内容を正確に伝えることを第一の目的とした本稿では、中世ロシア語や教会スラヴ語が複雑に入り組んだ雷帝の文体を十分に考慮した上で翻訳することはできなかった。

イヴァン雷帝とクールプスキー公の往復書簡

(I) クールプスキーがイヴァン雷帝に宛てた第一の書簡 (第一版)

クールプスキーがリトワよりツァーリなる君主にあてた書状。

その昔神に大いに称えられ、正教信仰において一きわ強く輝いていたが、今や、われらの罪ゆえに、逆らう者となってしまったツァーリへ。悟る者は悟るがよい。汝の良心は癩病におかされており、神を知らぬ異邦人の間にも見られぬほどだ。わたしはこれ以上すべてを順を追って話すことを自分の舌に許さなかった。ただ汝の強権により蒙った苦痛に満ちた迫害のゆえに、ツァーリよ、わたしはわが心がうけた数々の悲哀の一部を汝に書き記そうと思う。

ツァーリよ、汝は何ゆえにイスラエルの強者を滅ぼし、汝の敵を討つべく神が与え給うた軍司令官らを、様々な方法で死に至らしめたのか¹⁾。何ゆえ神の教会において、彼らの聖なる勝利の血を流し、教会の敷居を殉教の血に染めたのか²⁾。何ゆえ汝のため^{いちの}生命を惜しまぬ善意の人々にたいし、前代未聞の苦痛と死と迫害とを考え出し、正教徒にたいし裏切者、妖術使いその他不当な罪をきせ、光を闇に変え、甘きを苦いと言いくるめることに懸命になったのか³⁾。彼らキリスト教徒の指導者は汝の前にいかなる罪を犯したというのか。汝を立

1) 以下にクールプスキーは逃亡に先立つ数年間における雷帝の弾圧について語っていると推定される、「イスラエルの強者」とはここではロシアの諸公、貴族、軍司令官らを指している。

2) 二人のオボレンスキー諸公 (M. П. レプニンと Ю. И. カシン) のことか。クールプスキーの『モスクワ大公の歴史』によれば、レプニンは、宴会の席上、仮面をつけて踊るようツァーリに命じられたのに憤慨し、それを拒否したので、教会での晩禱の最中に殺されたという。1564年1月30～31日の夜のことであった。同じ夜カシン公も朝拝のときに殺害された、という。ジミーンやスクルィンニコフは両公の処刑をウロイ近郊におけるロシア軍の敗北と関連させている。

3) イザヤ書 5:20

腹させることがあったのであろうか。彼らはわれらの父祖が臣従していた驕れる国々を打ち砕き、汝の前に万事につけ服従せしめたのではなかったか⁴⁾。ドイツの堅固なる町々は彼らの鋭き知恵の働きにより、神から汝に与えられたのではなかったか⁵⁾。これにたいし汝は哀れなわれらを、一族諸共滅ぼすことによって報いたのではなかったか。ツァーリよ、おそらく汝は死ぬことがないと思っているのだらう。汝は恥ずべき異端に惑わされて、厳正なる裁き手、キリスト教徒の希望である神の子イエスの前に立つことを望まぬのであろう。この方は全世界を義をもって裁き、驕り高ぶる迫害者を一切容赦せず、彼らの罪を、よく言われるように、髪の毛にいたるまで⁶⁾問い糺そうとされるのである。この方こそわがキリスト、いと高きところで大いなる方の右手、ケルビム⁷⁾の座にあられ、汝とわたしの間を裁かれる方である。

わたしが汝から蒙らなかつた災難や迫害があるであらうか！汝がわたしにもたらさなかつた不幸や災厄があつたであらうか！汝はわたしに虚偽と裏切の罪をさせはしなかつたであらうか！わたしは汝から蒙つた様々な災厄をすべて順序だてて話すことはできない。それはあまりに多すぎるし、わたしの心はいまだ悲しみに打ちひしがれているからだ。だがすべてをまとめて話すならば、次のようにならう。わたしは一切を奪われ、汝によって神の地から理由なく追放されてしまった。汝は善にたいしては悪、愛にたいしては執念深い憎悪をもってわたしに報いた。汝のために水の如く流されたわたしの血は、わが神にむかつて汝を告発している。神は人の心を見透される。わたしは心のなかで熱心に考え、良心を証人に立てて、探し、求め、必死に思いめぐらしたが、自分が汝にたいしいかなる罪を犯したのか分らなかつたし、いかなる咎も見出すことができなかった。わたしは汝の軍勢を率いて出撃し、一度も汝に恥辱を与えたことがな

4) カザン汗国並びにアストラハン汗国の征服（1552年、1556年）のことであらう。

5) リヴォニア戦争（1558～83）初期にロシア軍はナルヴァ、ノイハウゼン、ドルパート（デルプト）、マリエンブルク、エルメス、フェリンなどの諸都市を占領した。

6) 詩篇 68：21ないしサムエル記上14：45またはマタイ10：30が念頭にあるものと考えられる。

7) 最上級の天使

かった⁸⁾。むしろ主の天使の御加護により常に輝かしい勝利を得て、汝の栄光を顕した。わたしは汝の軍勢の背を敵に見せたことがない。逆に汝の誉のために敵を華々しく打ち破った。それもこれも一年や二年のことではない。何年もの間わたしは汗と忍耐をもって苦勞してきたのだ。その間わたしは生みの親を見る機会も少なく、妻を知ることもなく、故郷から遠く離れ、汝の最果ての町にあって常に汝の敵と戦い、病苦を耐え忍ばねばならなかった。これについてはわが主イエス・キリストが証人であられる。だがこれに止まるものではない。数々の戦闘においてわたしは蛮人により負傷させられ、全身これ傷だらけになっている。だがツァーリよ、これらのことはすべて汝には無関係なのだろう。

わたしは汝の誉のために行ったすべての戦闘を順を追って述べようと思った。だがわたしはそれを断念した。神のみがそれをよく御存知であるのだから。実際この方こそ万事に報われる神である。それだけではない。神は一杯の冷たい水にたいしてすら報われる⁹⁾。ツァーリよ、さらに付け加えて汝に言おう。わたしが思うに、汝はもはや最後の審判の日にいたるまでわたしの顔を見ることはないであろう。だが以上のことについて、わたしが汝にたいし沈黙したままではいるとは思わぬがよい。わたしは生命の尽きる時まで、わたしが信ずる始めなき永遠の三位一体の神に、絶えず、涙ながらに汝のことを告発し叫び続けるであろう。そして大いなるケルビムの母、わが望みにして執りなし手である主なる聖母とすべての聖人がた、神の選び給うた人びと、またわが君フョードル・ロスチスラヴィチ公¹⁰⁾に加護を乞い求めるであろう。

ツァーリよ、われらがすでに汝によって、罪なくして滅ぼされ、抹殺されたと

8) クールプスキーは1550年初めて軍司令官（プロンスクの）に任命されて以来、ほとんど毎年軍事行動に従事している。彼は上記『歴史』においてカザン及びリヴォニア戦争における自己の活躍ぶりを詳細に描いている。

9) マタイ 10:42

10) クールプスキーもその一員であるヤロスラーヴリ諸公はスモレンスク公フョードル・ロスチスラヴィチ（1299年歿）を始祖としている。フョードル公は1294年ヤロスラーヴリを自己の領土に加えた。1463年地方聖人となり、後に全ルーシの聖人の列に加えられた。

さかしらに思わぬがよい。不当にも監禁され、追放されてしまったと思っ
てはならない。空しい勝利を誇るかの如くに喜んではならない。汝に処刑された者
たちが主の玉座の傍に立ち、汝にたいする復讐を求めているからだ。汝に不当
にも監禁され、[神の]地より追放された者たちが、朝な夕な汝を神に告発して
叫んでいるからだ！このかりそめの、はかなく過ぎ去りゆく世において、驕り
高ぶって、幾たびたりとも誇らば誇るがよい。汝はキリスト教徒の民に殉教の
杯を与えんと画策し、天使の姿¹¹⁾を辱しめ、軽んじている。これを汝はおもね
りへつらう追従者や悪魔の食卓仲間、また汝の忠実な^{ボヤール}貴族、すなわち汝の霊と
肉を滅ぼす者どもとともにやっている。彼らはその子らとともにクロノスの神
官¹²⁾も顔負けのことをやっている。だがこれについてもこれで止めよう。わた
しは涙にぬれたこの小さな書き物をわが柩に入れるよう命じよう。そして汝と
ともにわが神イエスの裁きの場に出たいと思う。アーミン。

わが君主アウグスト・ジギモント王¹³⁾の町ヴォルメルにて記す。わたしはこ
の君主の恩寵により、またそれ以上に神の御加護により、彼から多くの恵みを
賜わり、あらゆる悲哀にたいする慰めを得んことを望んでいる。

わたしは聖書に次のように記されているのを聞いた。姦通により生れ、神に
敵対するアンチキリストたる破壊者が、キリスト教徒の群にむかって悪魔によ
り放たれようとしている、と。事実今の時代にもわたしは一人の議員^{シンクリート}を見た。
誰もが知っているように、彼は姦通により生れ、今ではツァーリの耳に偽りの
言葉を囁き、キリスト教徒の血を水の如くに流している。彼は以前にもイスラ
エルの強者をアンチキリストが行ったのと同様に、打ち殺したのである¹⁴⁾。あ
あツァーリよ、このような追従者を側近におくべきではない。主の律法の書に

11) 古ルーシでは修道僧（ないしその生活）を「天使の姿」と表現した。ここでは雷帝
によって強制的に出家せしめられた者たち（たとえば Д. И. Курьер-Чуев
公, Т. Чечурин-Пухофなど）のいることを指している。

12) クロノスはギリシア神話でゼウスの父とされる、血に飢えた巨人。ここではおそら
くオプリーチニナの指導者バスマーノフ父子（А. Д. и Ф. А. Басмановы-Плещ-
евы）のことをクロノスの神官と言っている。

13) ポーランド王またリトワ大公、ジクムント二世（在位1529～72）

14) 上記バスマーノフ父子のいずれかをさすと考えられている。

第一にこう書いてある。「モアブびととアンモンびとそして私生児は十代までも神の教会に入ってはならない」¹⁵⁾云々と。

(II) イヴァン雷帝がクールプスキーに宛てた第一の書簡

(第一詳細版)

敬虔なる大君、ツァーリにして全ルーシの大公ヨアン・ヴァシーリエヴィチの、その大いなる全ロシア国家にあてた、アンドレイ・ミハイロヴィチ・クールプスキー公とその徒輩ら宣誓違反者の裏切を告発する書簡。

過去のいつの世にも今の世にもあられるわが三位一体の神、始めも終りもない永遠の父と子と聖霊。われらが生き活動するのはこの方の力によってであり、ツァーリらが大いなるものとされ、強き者らが法を定めるのもこの方のおかげである。神の唯一の言葉の聖なる十字架の、敗北を知らぬ勝利の旗が、敬神の念において並ぶ者なきツァーリ、コンスタンティヌス¹⁾とすべての正教徒ツァーリ及び正教の擁護者に与えられたのも、わが神イエス・キリストによったのである。さて神の言葉があまねく成就し、神の言葉を宣べ伝える僕らが、鷲が飛翔するように、全世界に広がったとき、敬神の光はロシア帝国にまで届いたのであった。かくて^{まこと}真実の正教を奉ずるロシア帝国の専制は、神の思し召しにより、ルーシの地を聖なる洗礼によって照らした大公ウラジーミル²⁾に始まり、ギリシア人から至高の名誉をうけた大公ウラジーミル・モノマフ³⁾、神を知らぬドイツ人にたいし大勝利を博した勇ましき大君アレクサンドル・ネーフスキー⁴⁾、

15) 申命記 23: 3

1) ローマ皇帝。大帝。在位306～337。

2) キエフ大公。在位980-1015。

3) 同在位1113-25。ウラジーミル・モノマフが「ギリシア人から至高の名誉をうけた」と考えられるようになったのは16世紀に入ってからのことである。これについては拙稿「《ウラジミール諸公物語》覚書」、『スラブ研究』24 (1979) を参照されたい。

4) ノヴゴロド公 (1236～63)、ウラジーミル大公 (1252～63)

ドンの彼方で神を知らぬハガルびとにたいして大勝利を博した誉高き大君ディミートリー⁵⁾を経て、わが祖父、不正にたいする復讐者、大君ヨアン⁶⁾、そして父祖伝来の領地の獲得者、至福の追憶のうちにある亡きわが父、大君ヴァシーリー⁷⁾、さらには今日ロシア帝国の王笏を手にする卑しきわれらに至るまで続いている。だからわれらにたいするその溢れんばかりの憐みゆえにわれらは神を称えるのである。神は今日までわれらの右手が同胞の血にまみれることを許されなかった。というのもわれらは誰からも帝国を奪い取ろうとは思わなかったからである。われらは神の思し召しとわれらが父祖と両親の祝福により玉座に生れ、ふさわしく養育され、成人し、神の命により即位した。われらは父祖と両親の祝福によって己^{おのれ}のものを取ったのであり、他人のものを取ったのではなかった。[本書簡は]多数の国々を領有するこの真の正教キリスト教専制国家からの、アンドレイ・ミハーイロヴィチ・クールプスキー公への命令書であり、キリスト教徒たるわれらからの貧しき回答書である。彼はかつて真の正教キリスト教世界とわれらが専制国家の貴族^{ゴヤーリン}にして顧問官、軍司令官であったが、今では生命を与える聖なる主の十字架への宣誓を破る者、キリスト教徒の殺害者、キリスト教の敵への内通者である。彼はあたかもイサウリア人^{グノエテズヌイ}⁸⁾や膿壊者⁹⁾、またアルメニア人¹⁰⁾やその同類の如くに、神のイコン崇拜から離れ、すべての聖なる戒めを踏みにじり、聖なる寺院を荒廃させ、聖なる容器と聖像を汚し、踏みにじった。彼は己が裏切の習いのままにヤロスラーヴリの君主¹¹⁾たらんと欲している。皆よくこれを知るがよい。

5) ドンスコイとよばれた。モスクワ大公（1363～89）「ハガルびと」とは中世ロシア人がイスラム教徒、とくにタタール人をさして呼んだ言葉。

6) イヴァン三世ヴァシーリエヴィチ。モスクワ大公（1462—1505）

7) ヴァシーリー三世イヴァノヴィチ。モスクワ大公（1505～33）

8) ビザンツ皇帝イサウリア朝の始祖レオ三世（717～41）のこと。

9) 同朝コンスタンティノス五世コプロニモス（741～75）のこと。ロシアでは Гноетезный 膿壊者と呼ばれた。

10) 同朝レオ五世（813～20）以上三人はいずれも、いわゆる聖像破壊皇帝である。

11) ヤロスラーヴリは13世紀末以来クールプスキー一門の世襲領地であった（「クールプスキー第一書簡」注10）参照）。クールプスキーは他の著作でもヤロスラーヴリの「君主」 владыка と自称している。

ああ公よ、汝がもし信仰深いと考えているのなら、何ゆえ己が唯一の霊を捨てたのか。最後の審判の日に信仰の代りに何を示そうと思っているのか。たとえば汝が全世界を手に入れたとしても、後で死が必ずや汝を捕えるであろう。もし汝が死を恐れていたのなら、何ゆえ悪魔に従う仲間や廻し者どもの偽りの助言を容れて¹²⁾、肉体のために霊を売り渡したのか。世界中で跋扈する悪鬼のように、自ら望んで汝らの友また従者となった者たちがいたる所でわれらを拒絶し、十字架への宣誓を破っている。彼らは悪魔を模倣し、われらにたいしあらゆる種類の罠を張りめぐらし、悪魔の習いに従って、躍起になってわれらを監視した。またわれらの発言や行動をうかがい、われらがあたかも肉体なき存在であるかのように考えては¹³⁾、そのことでわれらに幾多の中傷と非難をあげせかけ、われらのことを世界中で侮辱し、そのように汝にも吹き込んだのであった。ところが汝らはこれらの悪行の報酬としてわが領地と国庫の金を気前よく彼らに与え、彼らを誤って己の下僕と呼んでいる。汝らは悪鬼どものこのような戯言^{戯言}を鵜呑みにして、わたしに怒りをむけた。死をもたらす毒蛇の如くわたしに猛り狂い、己が霊を滅ぼし、教会を破壊する者となった。人に怒りをむけ、なおも神に反抗することが正しいことだと思っではならない。というのまたとい緋袍を身にまとう帝王であっても、人であって神ではないからだ。それとも呪われた者よ、汝は特別だと思っているのか。そんなことはない。もし汝が彼らと一緒に闘いを挑んでくるなら、そのとき汝は教会を荒らし、イコンを踏みにじり、キリスト教徒を滅ぼす者となるだろう。たとい自ら手を下さなくとも、己の死の毒に満ちた邪念によって汝は多大の悪事を働くことになるだろう¹⁴⁾。

思ってもみるがよい。軍勢が押し寄せてくるならば、幼児の柔らかな手足は

12) 後述訳注19)を参照。

13) 後述訳注30)を参照。

14) クールプスキーがキリスト教徒、すなわちロシア人に戦いを挑んで来るであろう、というツァーリの記述は、しばらくしてから実現されることになる。本書簡執筆の半年後1564年10月クールプスキーはリトワ軍を率いてポロツクを攻撃してくるのである。

馬蹄に踏みにじられ、引き裂かれることになるのである。もしそれが冬のことであれば、一層ひどいことになるだろう。これこそ犬の如き裏切者の汝が、邪まにも願っていることだ。それは乳呑児を殺害したヘロデの狂暴な悪行¹⁵⁾に比べることができるではないか。このような悪行を働くことを敬神の行為であると汝は思っているのだろうか。キリスト教徒、すなわちゲルマン人とリトワ人にたいし闘いをしかけているのはわれわれの方だと、もし汝が主張するとしたら、それはちがう。まったくちがう。たといこれらの国々にキリスト教徒がいるとしても、われらは父祖の伝統に従って、以前にもしばしばそうであったように、彼らと戦うであろう。だが今やわれらは、これらの国々には教会に仕える一握りの牧者や主の隠れた僕らを除いて、キリスト教徒はいないことを知っている。それだけではない。リトワとの戦争も汝らの裏切と悪意そして無分別な怠慢から始まったのである。

だが汝は肉のために霊を滅ぼし、うつろいやすき栄光のために朽ちぬ栄光を軽んじ、人にたいし怒りをむけ、神に反抗した。哀れなる者よ、汝は身も心もいかなる高みから、いかなる深みへと落ちしてしまったのかを思ってみるがよい。「もっていると思う者は奪われるであろう」¹⁶⁾と言われていることは汝にこそふさわしい。汝の信仰とは神を思うことではなく、自己愛のために己を滅ぼすことであったのか。だがそちらに居る者も¹⁷⁾、分別を有しているのであれば、汝の邪悪な毒のことを理解するであろう。汝がこのうつろいやすき短い一生のなかで、栄誉と富とを求めてこれらのことを行っており、死を逃れられないということである。もし汝が自ら言うように、正しく信仰深いのであるならば、何ゆえ汝は無実の死を恐れたのか。それは死ではなく、むしろ益ではないのか¹⁸⁾。いずれにせよ、結局のところ汝も死すべき身であるのだ。もし汝が

15) マタイ2:16

16) マタイ25:29

17) ポーランド・リトワ国民のこと。あるいはポーランド・リトワ王国の為政者のこと。雷帝は再三にわたって、外交ルートを通じ、クールプスキーの引き渡しを要求していた。

18) ピリピ1:21

サタンの僕である己の仲間の悪意ある虚言を信じて、汝にたいする偽りの死刑宣告を恐れたとしたなら¹⁹⁾、それこそ汝らが最初から今に至るまで裏切を意図していたことは明らかだ。何ゆえ汝は使徒パウロの言葉を軽んじたのか。彼は言う。「すべての人は支配者の権力に従うべきである。なぜなら神によらない権力は存在しないからだ。だから権力に反抗する者は神の命に反抗する者である。」²⁰⁾これをよく見、権力に反抗する者は神に反抗する者だということを理解するがよい。誰でも神に反抗するものは背教者と呼ばれるであろう。これこそ最大の罪である。これはあらゆる権力について述べられていることであり、流血と戦闘によって獲得された権力についてすらあてはまる。だがすでにわたしが上に述べたことを考えてみるがよい。われらは帝国を奪い取ったのではなかった。だとすればなおのこと、権力に反抗する者は神に反抗することになるのである。使徒パウロはまた次のようにも述べたが、汝はその言葉をも無視した。すなわち彼は言う。「僕たちよ、自分の主人の言うことを聴きなさい。人に仕える僕のように単に主人の目の前でのみ働くのではなく、神に仕える者の如く、単によき主人にのみならず、片意地な主人にたいしても、また主人の怒りを恐れてではなく、自己の良心のために仕え働きなさい。」²¹⁾というのも善を行って、なお苦しむことこそ神の御旨だからだ²²⁾。もし汝が正しく信仰深いのであれば、何ゆえ汝はこの片意地な君主であるわたしから苦難を受け、生命の冠を受けとろうとはしなかったのだろうか。

19) ツァーリはクールプスキーの逃亡が、ありもしない「死刑宣告」を恐れてのものであった、と主張する。確かに彼は後にポーランド王に対し、クールプスキーを「軽く罰しよう」としたことは認めつつも、死刑にしようとは考えていなかった、と書いた。だがルリエーも主張する如く、雷帝がクールプスキーを処刑しようとしていたことをうかがわせる他の記述もあるのであり、少くともクールプスキーがこれを疑っていなかったことは確かである。彼は逃亡以前に書かれたプスコフ・ペチェールスキー修道院への書簡（ヴァシアンへの第一書簡）で「バビロン」すなわちモスクワから迫り来る暗雲について語っている。キーナンやスクリニンニコフはクールプスキーの逃亡は、まったく別の理由でなされたことを主張するが、訳者は、クールプスキーがツァーリの迫害を深刻にそして実際に恐れていたと説くルリエーに賛成である。

20) ローマ13：1—2

21) エペソ6：5—7，Iペテロ2：18，ローマ13：5

22) Iペテロ3：17

だが汝ははかない栄誉と自己愛そしてこの世の甘き快樂のために、己の敬虔なる靈をキリスト教信仰と律法とともに完全に踏みにじった。汝は石の上に落ちた種に似ている。それは芽が出て育ったが、太陽が照り、暑くなると偽りの言葉によって誘惑され、たちまちのうちに枯れて実を結ばなかったのである²³⁾。偽りの言葉に従った汝はまた、道の上に落ちた種のようなでもある。かくて神の敵は汝の心から、言葉の種を播いた神にたいする真の信仰とわれらにたいする二心なき奉公の念とを奪い去り、己の思い通りに歩ませようとしたのであった。だからこそ神のどの書物にも、子供には父にたいし、僕には主人にたいし、信仰以外のことで反抗してはならないと記されているのだ。汝は己の父なる悪魔の唆しを受け、己の偽りの言葉を幾重にも編みこんで、自分が信仰のために逃亡したと主張するかもしれない。まことにこの信仰のためにわが主なる神は生き、かつわが魂も生きている²⁴⁾。だが汝はもちろんのこと、汝の同輩や悪魔の従者らも、われらのうちにこのような罪を認めることはできないであろう。それどころかわれらは受肉した神の言葉の助力により、またキリスト教徒の執りなし手、いとも浄き聖母の憐れみと全聖人の祈りにより、汝にこの回答を与えようと望んでいる。それだけではない。われらは聖なるイコンを踏みにじり、キリスト教の神の奥義をことごとく斥け、神を捨て去った者ら（汝は彼らに好意をもち、その仲間に加わったのである）にたいし、彼らの言葉の虚偽を暴露し、信仰を顕わし、神の恩寵がいかに光り輝いたかを広く宣べ伝えたいと願っているのである。

汝は己の従僕ヴァスカ・シバーノフにたいしわが身が恥ずかしいとは思わないのであろうか。彼こそ己が信仰を堅持し、死の門の傍に立ちながらもツァーリと全人民の前に、十字架への宣誓ゆえに汝を拒むことがなく、逆に力の限り汝を称え、汝のために進んで死のうとしたのである²⁵⁾。汝は信仰の点で彼には

23) マタイ13章，ルカ8:4以下

24) サムエル上20:3

25) ヴァシーリー・シバーノフが主人の手紙を携えてモスクワに来たり、雷帝に直接手渡し、苦難を受けながらなおも主人を裏切らなかったとする記述は、上述の如く（110ページ，注4），後代の伝説であろう。（17世紀末のいわゆる Латухинская

るかに及ばなかった。汝はたった一語の怒りの言葉のゆえに、己の唯一の霊はおろか、己が父祖の霊をも滅ぼしてしまった。というのも彼らは神の御旨により、わが祖父である大君に奉公すべきものとされていたからであり、彼ら自身も霊を尽して死にいたるまで仕え、己が子である汝らにも、わが祖父の子や孫らに仕えるように命じたからである。だが汝はこれらをすべて忘れ、裏切者の鞆みにならって、犬の如くに十字架への宣誓を破り、キリスト教徒の敵に与したのである。それだけではない。汝はその悪行には眼をつぶり、虚言をもって、天にむかい石を投げるが如く²⁶⁾、馬鹿げたことを口にし、己の従僕の信仰に恥じるのでもなく、彼のように己の主人に忠実に仕えることを拒絶してしまったのである。

汝の書簡をわれらは確かに受けとった。そして注意深く検討した。汝は己の言葉の裏に蛇の毒をひそませた²⁷⁾。だからそれが汝の考えでは蜂蜜と蜂房に満ちたものであっても²⁸⁾、実は苦艾^{にがよもぎ}よりも苦い。預言者が「彼らの言葉は油より柔らかだが、それは矢である」²⁹⁾と述べている如くである。はたして汝はキリスト教徒でありながら、キリスト教徒の君主にふさわしく仕えてきたであろうか。悪魔のように毒を吐き出しながら、はたして神から授かった君主にたいして然る

Степенная книга に端を発するこの物語は、H. M. カラムジーンによって取りあげられ、A. K. トルストイの見事な物語詩『ヴァシーリー・シバーノフ』（1840年）を通じて、広く知られるようになった。）16世紀の公式年代記（ПСРЛ. XIII, стр. 383）では、シバーノフは（おそらくは）国境で捕まり、ツァーリの下へ護送され、そこでツァーリに「己の主人オンドレイ公の裏切の件を話した」とされている。こちらの方が、おそらくは正確であろう。では雷帝がこの書簡のこの箇所²⁶⁾で記していることは事実²⁷⁾に反するのであろうか。そうではない。国境で捕まったシバーノフが、モスクワで自己の主人を裏切ることなく、しかも公が逃亡したこと（これはモスクワ側からすれば「裏切の件」であった）を明らかにすることは可能であり、自然ですらあったからである。シバーノフが何のためにリトワからロシアに戻ってきたか、クールプスキーの第一書簡を持参したとすると、捕えられた際に、その書簡はどうなったのか、問題は残るが、いずれにせよ彼がツァーリに直接主人の手紙を渡したことはなかった、というのが大方の一致するところである。

26) ベン＝シラの知恵（シラクの子イエスの知恵）27：25。

27) 詩篇 140：3。

28) 詩篇19：10。

29) 詩篇55：21。

べき尊敬の念を払ったであろうか。汝は己が書簡の冒頭に、賢者ぶってノヴァティアヌス流の思想を書きつけた³⁰⁾。ノヴァティアヌスと同様に汝は懺悔の本質を理解せず、人はその本性を越えていなければならないと考えている。汝はわれらのことを「正教信仰において輝いていた」と記している³¹⁾。確かにその通りである。だがかつてそうであっただけではなく、今日でもわれらは真実の信仰によって生ける真の神を信じている。汝はまた「[わたしが] 逆らう者であり、良心は癩病におかされていることを悟れ」とも書いている。だがこれこそノヴァティアヌスの思想である。汝は福音書の言葉を理解していない。そこでは次のように言われている。「罪の誘惑の多いこの世はわざわざだ。誘惑は必ずやってくるからだ。だが誘惑を来たらせる者はわざわざだ。そのような者は砥石を首に縛りつけて海の底に沈められる方がよい。」³²⁾汝は己の悪意で眼がくらみ、真理を見ることができないでいる。汝は主なる神の玉座の傍に立ち、常に天使らとともに仕える資格があると思っているのだろうか。世の救いのために生贄の子羊を手ずから屠る資格が汝にあるのだろうか。汝らは邪まな悪魔の助言者らとともにこれらすべてを冒瀆し、狡猾な策略をめぐらしては、われらを疲労困憊させているのではないか。まさにそのために汝らは幼少の頃からわが信仰を悪魔の如くに揺さぶり、神の恵みにより父祖からわたしに伝えられた支配権を奪って、己のものとしたのであった。だが己の帝国を自ら支配し、己の下僕に支配することを許さなかったからとて、良心が癩病におかされていることになるのだろうか。己の下僕に支配されたくないと願うことが理性に

30) ノヴァティアヌスは三世紀のローマ対立教皇。厳格な贖罪と純潔性を強調するあまり、懺悔の意義も認めなくなった。雷帝は彼があたかも人間の弱さすなわち肉体の存在を認めぬ者であるかのようにとらえている。なお、原文では Нават となっており、ノヴァトウスと訳すべきであるが（現に同様の思想をもつノヴァトウスなるアフリカ人聖職者も存在した）、史上名高いのはノヴァティアヌスの方である。現代ロシア語の訳者はノヴァトウスを採用しているが（また注解者ルリエーも一応区別しているが）、Переписка のインデックスでは両者を等置している（стр. 125, 383, 424）シュテーリン、フェンネルはノヴァティアヌスとしている。

31) 上記116ページ参照。以下雷帝はクールプスキー第一書簡の主張にたいし逐一反論していく。

32) マタイ18：6－7。

逆らうことなのだろうか。下僕に支配され、命令されることが輝ける正教の教えなのであろうか。

以上は俗事に関することである。靈魂と教会のことに関して言えば、たといわたしに何か小さな罪があったとしても、それは汝らの誘惑と裏切ゆえのことであった。ことにわれらは〔弱き〕人間なのであるから。罪を犯さぬ人間はなく、神のみが罪を犯さない。汝が人間より偉く、天使に並ぶ存在だと考えているのは間違っている。一体汝は神を知らぬ異邦人について何を言っているのだろうか！これらの国の支配者は自ら支配してはいないのだ。そこでは彼らの下僕が命令を下し、また支配している。これにたいしロシアの専制君主は太古の昔から自ら己が国家を支配し、貴族や高官らが支配したのではなかった。汝は邪まゆえ、このことを理解できなかった。汝は専制がかの司祭³³⁾の支配に服し、汝らの邪惡な命令に従うことを信仰に適うことと呼んだ。だが神がわれらに与え給うた権力を自ら所有し、司祭や罪深き汝ら悪人の支配に服すことを願わぬからといって、それが汝の考える如く、不信仰になるのであろうか。神の憐れみといとも浄き聖母の執りなし、全聖人の祈りとわが両親の祝福によって、われとわが身を滅びに渡さなかったことが、はたして汝らが悪意から考えついたように、「逆らって」理解していることになるのであろうか。事実わたしは汝の悪事のゆえにどれほど苦しんだであろう。以下にこのことを詳しく書きつらねよう。

もし汝が、われらが教会の儀式を然るべく守らず、逆に遊び興じている、と考えているならば、それもまた汝らの狡猾なる策略のゆえなのだ。なぜなら汝らはわたしを平穩な靈の生活から追い出し、パリサイびとのように負いきれぬ重荷を課し、汝ら自身は指一本貸そうとはしなかったからである³⁴⁾。それゆえわれらは教会の儀式をしっかりと果たすことができなかった。だがそれも

33) モスクワ・クレムリン内のブラゴヴェーシチェンスキー寺院司祭シリヴェーストルのこと。ツァーリの実上の懺悔顧問僧として、若きツァーリに大きな影響力をもっていた。1560年彼はツァーリから遠ざけられる。

34) マタイ23：4。

汝らが混乱させた帝国の統治を正すためであり、また汝らの悪しき狡猾なる策略から逃れようとしたためであった。遊興について言えば、それは人間の弱さから来ている。というのも汝らが多くの民を滅びの策略へと引きずり込んだので、わたしは彼らの弱さの地点にまで下り、これをなしたからだ。それはあたかも母親が子供にその幼いことを理由に遊びを許すが、彼らは成人するや遊びを止め、両親に教えられ、知恵によってより良きものに導かれて行くのと同様である³⁵⁾。あるいはまた神がイスラエルにたいし、悪魔にではなく神のみに犠牲をささげることを許したのもこの理由からである。わたしはこれにより彼らが己の君主たるわれらをよく理解し、汝ら裏切者に同情を示すことのないようにと願った。一体汝らの許では何も気晴らしなどしないというのであろうか。

また汝らにわたしを滅ぼすことを許さなかったことが、逆らうことになるのであろうか。汝こそ何ゆえ理性に逆らったのか。汝は理由なく死の恐怖にとりつかれ、己が霊と十字架の宣誓を顧みることがなかった。汝は自ら行わずに、われらに助言しようとしているのだ！まさに汝の知恵はノヴァティアヌスやパリサイびとの如くだ。ノヴァティアヌスの如くだというのは、汝が人間の本性を越えることを要求しているからであり、パリサイ的だというのは、自らは行わずに他人には行うことを求めているからだ。それだけではない。汝らは今なお、以前の如く、非難と中傷をわれらに浴びせかけている。そして野獣の如く猛り狂ってあらゆる悪事を行い、己が裏切行為に拍車をかけている。非難し中傷することが汝らの二心なき、好意ある奉公なのであろうか。汝らは悪魔のように身体を震わせながら、己の狡猾で勝手な判断によって、神の裁きを待つことなく、己の頭目たる司祭やアレクセイ³⁶⁾とともにわたしを犬の如くに裁いている。それゆえ汝らこそ神に逆らう者となっている。汝らは齋戒と精進において輝くすべての聖なる上人がたを拒み、罪びとにたいする慈悲心をも捨て去った。だがこの者らのなかにも、一度は罪におちたが再び立ちあがり（立ちあがることは難

35) Iコリント13:11。

36) 侍従官アレクセイ・フォードロヴィチ・アダーシェフのこと。シリヴェーストルとともにツァーリの宮廷で力を得、いわゆる「選抜会議」の実質的指導者となる。1560年失脚する。

かしいことではない!), 苦しむ者に援助の手をさしのべ、罪の深みから憐れみをもって引きあげた者は多いのである。彼らは苦しむ者らを、使徒が言うように「敵としてではなく、兄弟とみなして」³⁷⁾これを行ったのであるが、汝はこの教えをも拒んだのだ! このように彼らが悪魔に苦しめられたのと同様に、わたしも汝らに苦しめられたのである。

ああ犬よ、汝はこれほどの悪事を働きながら、何を書き、訴えようとしているのか。排泄物にも増してひどい悪臭を放つ汝の忠告を何にたとえようか。それとも汝は己の悪魔の如き共謀者が行ったこと、すなわち僧服をかなぐり捨て、キリスト教徒にたいし闘いを挑むことが正しいことだと思っているのだろうか。それとも汝らは、あれは強制的な出家であったと答えるつもりであろうか。だがそれはまったく正しくない。レストヴィチニク³⁸⁾も「わたしは不承不承修道生活に入った者が、自ら望んで僧となった者よりも一層正しくなるのを見た」と言っているのではないか。もし汝らが信仰篤いのであれば、何ゆえこの言葉を受けいれないのか。汝は同じく強制的に出家させられながら、修道生活を軽んじなかった者を多数知っているであろう。彼らはティモヒン³⁹⁾とはまるで違う。同じことは帝王についてもあてはまる。誰であれあえて修道生活を軽んじるようなことがあれば、決して己のためにはならない。それどころか霊と肉においてより苦き滅びが襲ってくるのだ。女婿のガーリチ公ロマンの命によって出家せしめられたスモレンスク大公リューク・ロスチスラヴィチの場合がそうであった⁴⁰⁾。これにたいし彼の公妃の篤き信仰は見事であった。彼は公妃を強制的な出家から解放しようとしたが、彼女はこのうつろいやすき王

37) II テサロニケ 3 : 15。

38) 6～7世紀シナイの神学者ヨアンネス・クリマクス。引用はその『梯子』第1章からである。(см. Переписка, стр. 383-384).

39) ティモフェイ-ティホン・プーホフ-チェチャーリン。クールプスキーと同時代の軍人。ツァーリの不興を買い、出家を命じられ、後にクールプスキーと同じ頃リトワに逃亡した。

40) 12世紀末—13世紀初頭のキエフ大公、1203年ガーリチ・ヴォルイニのロマン・ムスチスラヴィチ公に捕えられ、出家させられたが、1205年還俗した。父はスモレンスク大公であったが、リュークはノヴゴロド、オブルチ公を経て数度キエフ大公位についた。

国を望まず、朽ちぬ王国の生活を願って、進んで剃髪をうけ、スヒマ僧⁴¹⁾となった。これとは反対に彼は剃髪をうけながら、キリスト教徒の夥しい血を流し、聖なる教会と修道院を略奪し、修道院長や司祭、僧侶らを苦しめた。それでも彼は己の支配を最後まで維持することができず、その名も完全に忘れさられた。帝都〔コンスタンティノープル〕においてもこうしたことはさらに多く見うけられる。ある者は鼻を削がれ、他の者は僧服に身を包みながら再び帝位にかけ上り、そしてこの世では苦き死に、あの世では永遠の苦しみにあっている。自己愛と奢りからこれをなしたからである⁴²⁾。以上は支配者たちの例である。下僕たちに関しては言うまでもなからう。修道生活を蔑ろにする者には神の裁きが待っている。最近多くの者がいとも大いなる^{ソツクイト}会議の決定により出家せしめられた⁴³⁾。彼らがもし以前の名誉ある地位に復帰したとするなら、あえてこれを行わなかった彼らの先人に比し、一層厳しい〔神の裁きにあうであろう。〕

このように己の悪魔の習いに従って不信心を重ねながら、汝らはなお信仰深いと考えるのだろうか。それとも悪魔の習いに従い、奢り高ぶってこのような書簡を送ってくるとは、汝は己をイスラエル第一の勇者、ネルの子アブネル⁴⁴⁾であるとでも思っているのか。だが彼には何が起こったであろうか。サルヤ〔ゼルヤ〕の子ヨアブが彼を殺したとき、イスラエルは弱くなった。神の御加護により得られた敵にたいする「輝かしい勝利」が証明したではないか〔と汝は反問するだろう。〕まさに汝は奢り高ぶっていたずらに誇るばかりだ。汝と同様に行動したかの者〔アブネル〕を思うがよい。汝は旧約聖書がお好みらしい。ならばわたしは汝を彼に準えよう。彼はサウルの側妻レスファ〔リツパ〕を奪

41) スヒマはロシア修道制の最高の最も厳格な位階。

42) ビザンツ皇帝ユスティニアヌス二世リノトメトス（685～95、705～11）、レオンティウス（695～8）、アナスタシウス二世（713～16）のこと。前二者は鼻を削がれ、後者は一度出家しながら再度帝位をねらったが失敗した。

43) 雷帝がどの会議、また誰のことを念頭においているのか明らかではない。ルリエーは50年代の諸教会会議で異端として断罪されたマトヴェイ・バシュキンやフェオドーシー・コソイなどのことではないかと推察している。

44) 以下ネルの子アブネルに関しては、サムエル記下第2～4章を参照。ただし、アブネルを非難したのは、メムフィオス（メピボセテか）ではなくイシボセテである。

い、己の主人に恥辱を与えた。そのとき彼の武勇は彼にいかなる益をもたらしたであろうか。サウルの子メムフィオスがこのことで彼を非難したとき、彼は立腹し、サウルの家を出て、ついには滅んでしまった。汝は己の悪魔の習いにおいて彼に似ている。汝も高ぶって分を越えた名誉と富とを求めているのだ。アブネルが己の主人の側妻を奪おうとしたように、汝もまた神がわれらに与え給うた町や村を奪い、猛り狂いながら、同じく不信心を重ねたのである。それとも汝はわたしにダビデの嘆きの歌を想えというのであろうか。だが彼は正しきツァーリであった。殺人は犯したが、望んでのことではなかった⁴⁵⁾。ところが不信仰者は己の滅びのうちに滅びる。見よ、誰でも主人を敬わない者は、武勇も助けとはならないのである。だがさらにアヒトペルの例を出そう⁴⁶⁾。彼も汝同様アブサロムにたいし、父に刃向うよう悪しき助言を与えた。だが彼の助言はその後長老フセイの知恵によって斥けられ、破綻してしまった。かくて全イスラエルがわずかな人びとによって征服され、彼は縊死をとげて、滅びに至ったのである。事情は以前と同様、今日も変わらない。神の恵みは弱いところに現われる⁴⁷⁾。教会にたいする汝らの悪魔の如き反逆はキリスト御自身が打碎かれるのである。往古の背教者ナヴァシチ〔ネバテ〕の子エロヴォアムを見るがよい⁴⁸⁾。彼はいかにしてイスラエルの10部族とともに背反し、サマリアに王国を建て、生ける神から離れて子牛を崇拜したのであろうか。このサマリア王国はツァーリらの軽挙妄動により混乱に陥り、やがて滅亡したのである。これにたいしユダは、たとひ小国であっても秩序立っており、神の望まれる時まで存続した。「それはエフライムの雌牛の如く暴れ出した」⁴⁹⁾と預言者が言うとおりである。また言われている。「エフライムの子らは急ぎ弓を取り、引絞ったが、戦闘の日に引きかえした。彼らは主の命令を果さず、主の律法^{おきて}のうちに歩むことを望まなかったからである。」⁵⁰⁾「人よ、戦いを止めなさい。人との戦

45) サムエル下第1章。

46) サムエル下第17章。

47) II コリント12: 9。

48) 列王紀上11: 26以下。

49) ホセア4: 16—17。エフライムはイスラエルをさす。

50) 詩篇78: 9—10。

いでは汝は敗れたり、勝ったりするだろう。だが教会との戦いでは、汝は必ずや敗れるであろう。先の尖った杖を踏めば大いに痛む。それでも踏み込めば、足は血だらけになるであろう。海は波立とうと荒れ狂おうと、イエスの船を沈めることはできない。われらは石の上に立っているからだ。われらには船長の代りにキリストがいる。漕ぎ手の代りには使徒、船員の代りには預言者、蛇手の代りには殉教者と上人がたがっている。彼ら全員のおかげで、たとい全世界が荒れ騒ごうとも、われらが沈む恐れはない。このように汝はわたしを輝ける者となしながら、己は滅びへと向っているのである。」⁵¹⁾

汝はなぜ支配者たる者が野獣の如く猛り狂ったり、[逆に]黙って静まったりすべきではないことを理解できなかったのだろう。使徒は「ある者は熟慮の上憐れみ、他の者は火中から引き出して、^ス恐れ^トの念^ラをもって^キ救い^ムなさい」⁵²⁾と述べている。汝も見るとおり、使徒が^ス威嚇^トをもって^キ救うよう命じているのである⁵³⁾。このように信仰篤きツァーリらの時代にも、汝はさらに激しい迫害が数多くあったことを認めるであろう。一体ツァーリたる者が、汝が愚かにも考えるように、その時々状況に関わりなく、常に同じように振舞うことができるだろうか。強盗や盗人が懲罰を免れうるだろうか。（狡猾な策略をめぐらす者は一層危険である！）もしそうなら、どの王国も混乱と内紛で分裂してしまうであろう。はたして牧者たる者は己の臣民の混乱に注意を払わずにおるべきであろうか。

汝は悪漢を受難者と呼んでいるが、恥ずかしくはないのであろうか。誰が何のために苦しむのかを見究める必要がある。使徒も「誰でも正当に、すなわち信仰のゆえに苦難を受けるのでないならば、冠をうけることはない」⁵⁴⁾と叫びながら訴えている。聖金口^{スツトウス}と大アタナシウスもその著述のなかで次のように記し

51) 4—5世紀の神学者聖金口ヨアン（ヨアンネス・クリュソストモス）の説教ないし書簡からの引用。（cf. Fennell, 34—35）。

52) ユダ22—23。

53) 以下雷帝は、ツァーリたる者が威嚇、すなわち力をもって支配すべきことを説くのであるが、その論拠とした上記「ユダの手紙」の第23節では「恐れ^トの念^ラとともに」とあるのみである。雷帝はこれを「威嚇〔ないし恐怖〕をもって」と解釈している。

54) II テモテ2 : 5

ている。「盗人や強盗，悪党や姦通者は苦しみをうける。彼らが祝福をうけることはない。彼らは神のためではなく，己の罪のために苦しみをうけている。」⁵⁵⁾神の使徒ペテロも「善を行って苦しむ方が，悪を行って苦しむより優っている」⁵⁶⁾と述べている。汝はこれにより，どこでも悪事を働く者の苦難が称えられているわけではないことを理解したであろうか。汝らは己の悪魔の習いゆえに蛇の排泄物に似ている。汝らは毒を吐きながら，人の懺悔も，律法違反も，その時々状況も一切顧みることなく，己の狡猾なる裏切を悪魔の策略と舌先三寸でおおい隠そうと欲している。

はたしてその時々状況に応じて生きることは理性に逆らうことなのであるか。ツァーリのなかのツァーリ，偉大なるコンスタンティヌスのことを想ってみるがよい。彼は帝国のために実の子を殺したのではなかったか！⁵⁷⁾また汝の先祖フォードル・ロスチスラヴィチ公は，復活祭のときにスモレンスクでいかほどの血を流したことだろう。しかも彼らは聖人に数えられているのである！神の御心と御旨にかなうダビデはどうであっただろう。彼はエルサレムに受け入れられなかったとき，彼の霊を憎むエブスびとや足なえ，めしいをことごとく撃つように命じなかったであろうか⁵⁸⁾。汝は神に選ばれたツァーリを受け入れようとしなかった者らを，なぜ殉教者に数え入れるのか。このように信仰篤きツァーリが，か弱い民にたいしても己の力と怒りとを示すのを，汝はどう思うだろうか。それとも今日の裏切者はあれほどの悪事は働かなかったとでも言うのであろうか。とんでもない。彼らはもっと悪質である⁶⁰⁾。前者はただ入城を阻止し，しかも失敗したのであったが，後者は神から授かり，彼らの国

55) cf Fennell, 36-37.

56) I ペテロ 3 : 17.

57) コンスタンティヌス大帝の長子クリスプスは326年叛逆罪の廉で処刑された。

58) 上記「クールプスキー第一書簡」訳注10)を参照。

59) サムエル下 5 : 6—8。

60) ここで言う「今日の裏切者」とは1553年，雷帝が病床にあったとき，後継者（ディミートリー）への宣誓を拒否した（と雷帝が考えた）貴族，側近らまたスタリツキー公らのグループのことであろうと思われるが，神に選ばれたツァーリである雷帝に反抗した者たち一般のことともとれる。

で帝位に生れついたツァーリを、一度は受けいれながら拒絶したのである。彼らは十字架の誓いを破り、ありとあらゆる手段で、すなわち言葉と行為により、また秘かに策略をめぐらして、なしうる限りの悪事を働いたのである。前者より後者の方がはるかに厳しい処罰にあうのは当然である。もし汝が「前者の悪事は公然たるものだが後者のそれは隠れたもの」と反論するのであれば、それこそ汝らの悪魔の習いがより悪質であることを示している。汝らの善行と奉公は人の眼に明らかだが、汝らの心からは破滅へと導く策略と悪行、死の破壊が出てくる。汝は口では称える。だが心では呪っている⁶¹⁾。ところがツァーリたちの支配には称賛すべき事柄も数多くあるのである。ツァーリたちは己が帝国のあらゆる混乱を鎮め、悪魔にも似た者共の悪行と謀略^{はかりごと}を斥けた。ツァーリたる者は常に十分に警戒していなければならないからだ。あるときは柔和に、あるときは厳しくあらねばならない。善人には憐れみと優しさを、悪人には激怒と苦難を与えるのである。それができない者はツァーリではない。ツァーリは善行ではなく、悪行にとって恐怖である。もし汝が権力を恐れたくないのなら、善を行うべきだ。悪を行うなら、恐れなければならない。彼は理由なく剣を帯びているわけではないからだ。彼は悪を行う者に復讐し、善を行うものを賞賛する⁶²⁾。もし汝が善良で正しいのなら、会議の席上で炎が燃えあがったとき、何ゆえそれを消さずに、むしろ煽りたてたのか⁶³⁾。汝は己の賢き知恵の助言によって悪しき助言を無効にすべきであったのに、むしろ毒麦を一面に播いたのである。預言者の次の言葉は汝にこそふさわしい。「見よ、汝らは皆火を燃やす。[悪しき]助言に従って自ら燃やした火の炎のなかを歩むがよい。」⁶⁴⁾ 一体汝は裏切者のユダと同類ではないだろうか。彼は使徒たちと共に過ごしながら、他方ではユダヤ人とも誼^{よし}を通じ、金銭のために万人の共通の主に猛り狂って怒りをぶつけ、彼を死へと渡した。これと同様に汝もわれらとともに暮らし、

61) 詩篇62: 4

62) ローマ 13: 3-4

63) 再び1553年の宣誓拒否事件のことであろう。

64) イザヤ 50: 11

われらのパンを食し、われらに仕えると誓いながら、心ではわれらにたいしあらゆる悪事を企んだのである。はたして汝は一切の邪心なしに、万事において善を願うと誓った十字架の宣誓を守ったであろうか。汝の悪しき策略以上に悪質なものがあるだろうか。賢者が「蛇の頭にまさる頭はない」⁶⁵⁾と言う如く、汝の悪事にまさる悪事はないのである。

それなのに汝がわたしの霊と肉の教師などでありえようか。誰が汝をわたしの裁き人また主人に任命したのだろうか。それとも汝は最後の審判の日にわが霊に代わって答えてくれるのだろうか。使徒パウロは言う。「宣べ伝える者がいないのに、どうして信ずることがあろうか。遣わされないのにどうして宣べ伝えることができるだろうか」⁶⁶⁾と。こう言われたのはキリスト降臨の時代のことであった。ところで汝は一体誰から遣わされたのか。誰が汝を、汝が厚かましくも自称する教師の位につけたのか。使徒ヤコブはこれを否定して次のように言っている。「兄弟たちよ、汝らのうち多くの者は教師にはならぬがよい。汝らはそれによりますます罪が増し加わることを知っているのだから。われらは皆多くの過ちを犯すものである。言葉において罪を犯さぬ者は完全な人であり、全身を制御することができる。馬を御するためにその口に轡^{くわ}をはめる者も同様、馬の全身を引きまわすことができる。また船を見るがよい。それがいかに大きく、また激しい風に吹きまわれようと、小さな舵一つで操縦者が望む方向に進められる。同様に舌も小さな器官であるが、よく大言壮語する。また小さな火でも何と多くのものを燃やすことだろう！舌は火、不義の飾りである。舌はわれらの器官の一つにすぎないが、全身を汚し、生命の車輪を焼きつくし、自らも地獄の火で焼かれてしまう。獣や鳥、這うものや魚などあらゆる生きものは人間によって支配され、飼い馴らされている。だが舌を支配することのできる者は一人もいない。その悪は死の毒に満ち、制御不能だ。われらはこの舌で神と父を称え、同じ舌で神に似せて創られた人間を呪っている。同じ口から賛美と呪いが出てくるのである。愛する兄弟たちよ、このようなことがあ

65) ベン＝シラ 25: 15

66) ローマ 10: 14—15

てはならない。泉が同じ穴から甘い水と苦い水を出すことがあるだろうか。わが兄弟たちよ、いちじくの木がオリーブの実をつけ、ぶどうの木がいちじくの実をつけることがあるだろうか。また一つの泉が塩からい水と甘い水を出すだろうか。汝らのなかで知恵があり物わかりのよい者は、知恵にかなう柔和な行いを善き生活によって示しなさい。もし汝らが心のうちに苦きねたみや争いの念を抱いているなら、誇ってはならない。真理にそむいて嘘をついてはならない。このような知恵は上から降りてきたものではなく、地と霊と悪魔に属するものである。ねたみや争いのあるところには、混乱とあらゆる悪がある。しかし天の知恵はまず第一に清く、ついで平和で優しく、従順で、憐れみと善き実に満ち、疑いを知らず、偽りが無い。義の実は平和をつくり出す人によって柔和のうちに播かれる。汝らのなかの争いと罵り合いは一体どこから来るのか。汝らの心のなかで荒れ狂う情欲からではないのか。汝らは欲するが得られない。そこで人殺しをする。汝らはねたむが手に入れることはできない。そこで罵り、戦う。だが得られない。それは求めないからだ。求めても得られないのは、悪い求め方をするからだ。また情欲のために用いるからだ。神に近づきなさい。そうすれば神も汝らに近づいてこられる。罪びとよ、手を浄めなさい。二心ある者よ、心を浄めなさい。兄弟たちよ、互いに中傷しあってはならない。己の兄弟を中傷し裁く者は、律法を中傷し、律法を裁くのである。だがたとい汝が律法を裁くとしても、汝は律法の創造者でも審判者でもない。立法者と審判者は一人であり、この方こそ救うことも滅ぼすこともできる。しかるに友を裁く汝は一体何者なのであろうか。」⁶⁷⁾

それとも汝は帝国が無学な司祭と邪悪な裏切者どもにより支配され、ツァーリが命令されることを輝ける敬神の業と考えているのであろうか。無学な輩の口を封じ、邪悪なる者どもを斥け、神に選ばれたツァーリが自ら君臨することが理性に反し、良心が癩病におかされていることになるのであろうか。だが汝は司祭らによって支配された帝国が必ず崩壊するであろうことを知るであろう。それにもかかわらず汝は一体何を追い求めているのか。ギリシア人の如くに、

67) ヤコブ 3, 4 : 1-3, 8-12

帝国を滅ぼし、トルコ人に屈服することをでであろうか。われらにもこの滅びの道を薦めようというのか。このような滅びはむしろ汝の頭上にあるように！まさに汝は使徒がテモテに書いたような者たちに似ている。「わが子テモテよ、このことを知っておきなさい。終りの日には苦難の時が始まる。人びとは自分を愛する者、金銭を好む者、不遜なる者、傲慢なる者、冒瀆する者、親に反抗する者、恩を忘れる者、不浄な者、無情な者、中傷する者、密告者、無節制な者、粗暴な者、善を好まぬ者、裏切者、厚顔な者、驕慢な者、神よりも快楽を愛する者、信心深く装いながらその実信仰を捨て去る者となるであろう。汝はこれらの者を避けなさい。彼らは常に学んでいるが、様々な欲望に惑わされて、決して真の知恵に達することはできなかったのである。ヤンネとヤンプルがモーセに敵対した如く、彼らも真理に敵対する。彼らの知識は腐っており、信仰は鍛えられていない。彼らが多くの点でこれ以上に成功することはない。彼らの愚かさはかの者らの場合と同様、万人の眼に明らかになるであろう。」⁶⁸⁾

それとも司祭や不遜きわまりない狡猾な下僕が支配し、ツァーリは単に玉座にあって、ツァーリとして尊敬されるのみで、権力の点では下僕に優るところがないというのが光なのであろうか。ツァーリが帝国を治め、支配し、下僕はその命令に下僕として従うことを闇だというのであろうか。彼自らが統治せず、どうして専制君主とよばれるだろうか。使徒パウロはガラテヤびとにこう語っている。「相続人が子供である間は、彼は下僕に優るところはない。彼は父の定める時までは家令や後見人の下におかれている。」だがわれらはキリストの恵みにより、父の定める年齢になったので、もはや家令や後見人の下におるべきではないのだ。

汝はまたわたしが一つの言葉をあれこれ言いかえているにすぎないと言うのだろうか。だがそれもすべては汝らの悪魔の如き策略に原因と責任があるのだ。というのも汝らは司祭と謀って、わたしを名目的な君主に祭りあげ、実際には汝らが司祭とともに君臨するように企んだからである。すべてはそのために起っ

68) II テモテ 3 : 1-9

69) ガラテヤ 4 : 1-2

たのだ。それも汝らが今日まで悪しき謀略^{はかりごと}を思いめぐらしてきたからだ。想い起すがよい。神がイスラエルを奴隷の身分からひき出されたとき、神は民を治めるのに聖職者や多数の指導者を立てたであろうか。そうではなかった。神はモーセ一人をツァーリとして民の支配者としたのであった。だがモーセは祭司職につくようには命じられなかった。祭司に命じられたのは彼の兄弟アロンであった。他方アロンは民を治めることを一切禁じられた。それでもアロンが民を治めたとき、彼は民を主の道からはずれさせてしまったのである⁷⁰⁾。だからよく注意すべきである。祭司はツァーリの職務を果すべきではない。同様にダタンとアビラムが権力を奪取しようと望んだとき、彼らはいかに滅び、いかに多数のイスラエル人を滅びに導いたことであろう⁷¹⁾。このような滅びは汝ら貴族にこそふさわしいのだ！この後イスラエルの士師にはイエス・ナヴィン〔ヌンの子ヨシュア〕が、祭司にはエレアザル^{ツァーリ}がなった。それ以降祭司エリの時まで以下の士師が支配した。ユダ、バラク、エフタ、ギデオンその他多数である。彼らは敵にたいしいかに輝ける勝利を博し、イスラエルを救ったことであろう。だが祭司エリが祭司職と世俗権力とを一身に帯びたとき、たとえ彼自身は正しく善良であったとしても、聖俗両権力から富と名声が生み出されることになった。かくて彼の二人の息子ホフニとピネハスは真理から迷い出て、彼自身も二人の息子とともにおぞましき死をむかえることになった。全イスラエルもまた敵に破られて、主の契約の箱はダビデ王の治世まで囚われてしまったのである⁷²⁾。汝は見たであろうか。祭司職と指導者の身分はツァーリ権力とは相容れないのである。だが以上は旧約聖書における事例である。新たな恩寵の時代、ローマ帝国において、ギリシア人の間では汝らの悪魔の如き願い通りの事が起った。皇帝アウグストゥスがいかにして全世界を支配したかを見るがよい。彼はアラマニヤ、ダルマチア、イタリア全土、ゴート人、サルマート人、アテネ人、シリヤ、アジア、キリキヤ、アジア、両河地方、カッパドキア諸国、ダマスクス

70) 出エジプト 32章

71) 民数 16章

72) サムエル上 1-4章

の都、神の都エルサレム、アレクサンドリア、エジプト国家さらにはペルシア諸国をも征服した⁷³⁾。これらの国々はすべて長期にわたって単一権力の下にあり、それは信仰において第一の大帝コンスタンティヌス・フラヴィウスの治世まで続いた。だがその後彼の子供らが権力を分割した。コンスタンティヌスは帝都に、コンスタンティウスはローマに、コンスタンスはダルマチアに君臨した⁷⁴⁾。それ以来ギリシア国家は分割され、疲弊し始めた。またマルキアヌス帝⁷⁵⁾治世にもイタリアで多数の諸侯、地方権力者が、汝らの悪魔の策略の如くに叛乱をおこし、レオ大帝⁷⁶⁾治世にはその各々が、アフリカのジンジリヒ王や他の多くの者のように、それぞれの地方を支配するに至った。これ以後ギリシア帝国の秩序はまったく廃れ、皆ただ権力、名声、富を求めることに精を出し、互いに戦って自滅してしまった。デュラキウムのアナスタシウス・ディコルス治世⁷⁷⁾にギリシア国家はさらに衰えた。ペルシア人が戦いを挑み始めたからだ。彼らはメソポタミア府主教管区を奪いとった。またこのときヴィタリアンのような軍人が多数蜂起し、軍勢を率いてコンスタンティヌスの都の城壁におしよせた。マウリキウス治世⁷⁸⁾にもギリシア国家はいたく病み衰えた。迫害者フォーカス治世⁷⁹⁾にはペルシア王ホスローがトラキアを奪った。ついでヘラ

73) アウグストゥスの征服した地方名のうちアラマニヤはゲルマン人地域、アジアとアジアが区別されている理由は不明。両河地方はメソポタミアのこと。

74) コンスタンティヌス大帝の歿(337年)後、帝国は三人の子の間で次のように分割された。すなわちコンスタンティヌス二世が西方の皇帝となり(イヴァンはむしろ東方の皇帝としている)、コンスタンティウス二世が東方の皇帝としてアジア諸属州、トラキア、エジプトを領し(イヴァンが記す如くローマをではなく)、コンスタンスは、イタリア、アフリカ、バルカン諸属州を得た。

75) ビザンツ皇帝 在位450~57

76) 同 在位457~74。ジンジリヒはヴァンダル王ガイセリック(428~77)のこと。

77) ビザンツ皇帝 在位491-518、その治世の502—505年帝国はペルシアと戦い、メソポタミアの若干の都市を失った。515年にはトラキアでヴィタリアンが蜂起したが、失敗した。

78) ビザンツ皇帝在位582-602

79) 同 在位602—10、ペルシアのホスロー王(二世590—628)は610年に小アジアに進出し、その後コンスタンティノープルを包囲するなど、版図を東西に拡大した。

クリウス⁸⁰⁾が弱体化した帝国を手にしたが、州長官や高官、議員らは皆互いに権力と富を求めて戦いを止めず、町や州や所領を奪い続けた。ギリシア帝国はこれらすべてのことゆえに崩壊寸前となった。鼻なしユスティニアヌス治世⁸¹⁾になるとギリシア人は蛮族によって手厳しく打ち破られ、多数の戦士が斃れた。この頃ブルガリア国家が独立していった。だが州長官や議員などすべての権力者は権力を求めて互いに戦うことを止めず、己の欲するものをすべて手に入れようとした。都市でも地方でも彼らの所領と富は数えきれぬほどだった。預言者が述べる通りである。「彼らの馬は数限りなく、彼らの財宝も数えきれない。彼らの娘たちは綺麗に飾られた教会のようにめかしたて、着飾っている。彼らの倉は満ちあふれて、こぼれ落ちそうだ。彼らの羊は多産で、放牧地に繁殖する。彼らの雄牛は肉づきがよく、疫病で倒れることも、盗まれることも、逃げ去ることもない。その牧場には悲嘆の叫びがあがることがない。」⁸²⁾

汝はこれらの人びとを、汝らの悪魔の願い通りにほめ称えているが、それは何ゆえであろうか。彼らの本性は預言者が「だが神の民、彼らの主なる神は………」⁸³⁾と語るとおりである。預言者イザヤも語る。「汝らは何ゆえ不法を積み重ねて、なおも打たれようとするのか。汝らの頭はことごとく病み、汝らの心はことごとく悲嘆にくれている。足から頭まで完全なところはなく、かさぶたと潰瘍と火傷ばかりだ。張るべき膏薬も、塗るべき油も、巻くべき包帯もない。汝らの地は荒れ果て、汝らの町は火にて焼かれ、汝らの国は目の前で異邦人により食らい尽される。それは異邦人に破壊され、住む者もない。シオンの娘がぶどう畑の小屋のように、果樹園の果実置場のよう、ただ一人残った。忠実な者たちの町シオンがどうして遊女となったのか。それは正しい裁きに満ちていた。真実がそのうちに宿っていたのに、今は人殺しばかりだ。汝らの銀には不純物が混じり、居酒屋はぶどう酒に水を混ぜている。汝の公たちは信仰を捨て、盗賊の仲間に入り、賄賂を好み、報酬を追い求め、孤児に法の

80) ビザンツ皇帝在位610—41

81) ユスティニアヌス二世リノトメトスのこと。注42)を参照。

82) イザヤ 2 : 17, 詩篇144 : 12—14

83) 原文の意味、出典不明。

庇護を与えず、寡婦の訴えに耳をかさない。それゆえ万軍の主なる神、イスラエルの強き神がこう言われる。『ああ、イスラエルの強者にわざわざあれ。わが怒りは敵にたいし止むことがなく、わが^{あか}仇にたいしわたしは裁きを行う。わたしは汝にわが手をあげ、汝を焼いて浄める。わたしは不信仰者を滅ぼし、無法者を汝から取り除く。高慢なる者をすべてうち砕く。こうしてもとのとおりに汝の裁判官を立て、初めのとおり^に汝の顧問官を立てる。それ以後汝は正義の町、母なる町、忠実なるシオンと唱えられる。正しい裁きと憐れみをもって囚われの身から救い出されるからだ。だが無法者と罪びとはともにぬぐい去られ、主を捨て去る者は滅びてしまう。なぜなら彼らは自ら論じ合った偶像のゆえに辱かしめられ、自ら創った神像のゆえに顔を赤らめ、自ら望んだ果樹園ゆえに恥じるだろうからだ。彼らは葉のない果樹、水のない果樹園のようになるであろう。彼らの強き力は麻くずのようになり、彼らの業は燃える火花のようになる。無法者と罪びとはともに焼かれ、それを消す者はいない。』⁸⁴⁾

その後アスピマル、フィリピコスまたアドラミュティオンの鬚のテオドシウス⁸⁵⁾の治世に、ペルシア人がエジプト地方とダマスクスをギリシア人から奪った。同様に膿壊者コンスタンティノス⁸⁶⁾の治世にスキタイ人が離反した。ついでアルメニア人のレオ、アモリア人ミカエルまたテオフィロス⁸⁷⁾の治世にはローマとイタリア全土がギリシア帝国から離脱した。彼らはフランク奥地から出たラテン侯カール⁸⁸⁾を自らのツァーリに選んだ。そしてイタリア各地に、王、侯、総督、長官を立てた。同様にオーストリア、イスパニア、ダルマチア、またフランク人、上ドイツ人、ポーランド人、リトワ人、ゴート人、ヴァラキア人、モ

84) イザヤ 1: 5-8, 21-31

85) ビザンツ皇帝ティベリオス三世(アスピマル在位698-705)とフィリピコス(バルダネス711-13)はアラブ人(ペルシア人ではなく)とブルガリア人と激しく戦った。テオドシウス三世は在位715-17。

86) コンスタンティノス五世コプロニモスのこと。注9)参照、ここで言われているスキタイ人はおそらくブルガリア人のこと。

87) ビザンツ皇帝レオ五世(813-20)、ミカエル二世(820-29)、テオフィロス一世(829-42)

88) フランク王カール大帝(768-814)が(西)ローマ皇帝として戴冠されたのは800年のことである。それゆえレオ五世らより以前のことであった。

ルダヴィア人、さらにセルビア人、ブルガリア人が各自の支配者を立て、ギリシア帝国から離脱していった。かくてギリシア帝国は大いに乱れ崩壊せんばかりになった。またミカエルと信仰篤きテオドラ皇妃⁸⁹⁾の治世に、ペルシア人が神の都エルサレムとパレスチナの地、フェニキア諸地方を奪取した。他方帝都も四方から厳しい圧力にさらされ始めた。あらゆる方向から頻繁に襲撃と戦争がしかけられ、動揺しだしたのである。だが州長官や議員たちは皆、己の悪習を改めもせず、帝国のかくの如き惨状を案ずることもなく、帝国の滅亡をただただ夢、幻の如くに考えていたのである。

汝らもまた彼らと同様に、己の悪魔の欲望に従って分に過ぎた栄光と名声と富を得んと望み、キリスト教徒の滅びを願っている。まさにこのようにしてギリシア人は多くの国々に貢租を納め始めた。以前には彼ら自身が貢租を取り立てていたのだが、その後彼らが支払いを始めたのである。それは汝らの悪しき狡猾な企みによって惹き起されたのと同様の、国の混乱のゆえなのであって、神が望まれたことではない。このようにして帝都は厳しい圧力にさらされることとなった。それはアレクシオス・ドゥカス・ムルズフロス帝治世まで続いた。このとき帝都はフランク人に奪われ、悲惨な占領時代を体験したのであった⁹⁰⁾。こうしてギリシア国家の荘厳と美はまったく失われてしまった。だが後にパイオロゴス朝初代皇帝ミカエル⁹¹⁾が帝都からラテン人を追い出し、苦境に立つ帝国を再建した。帝国はドラガーセスとよばれるコンスタンティノス帝治世まで続いた⁹²⁾。だがこの皇帝のとき、神を知らぬマホメットがわれらキリスト教徒の罪ゆえに、激しい風と嵐のように押しよせ、ギリシア帝国を跡かたもなく破壊しきった。

よく注意し、悟るがよい。権威や権力が多数ばらばらにあるときには、いか

89) ビザンツ皇帝ミカエル三世（842—67）、テオドラはその母。ミカエル幼少期の摂政。ここのペルシア人も正確にはアラブ（サラセン）人とあるべきところ。

90) ビザンツ皇帝アレクシオス五世（1204）の治世におけるラテン帝国（1204—61）の成立。

91) ミカエル八世（1261—82）

92) コンスタンティノス十一世（1449—53）

に統治されることになるのかを。そこではツァーリたちが州長官や議員らに従属したために、滅びに至ったのではなかったか。汝はわれらもこのような滅びの道を歩むよう助言するのであろうか。帝国に秩序を与えず、悪事を行う者共を抑えもせず、かくて帝国を異邦人の破壊に委ねることが信仰深いことなのであろうか。それとも聖なる教えはかの地においてこそ守られた、と汝は主張するのであろうか。ああ、素晴らしい。まったくそのとおりだ！だが己の霊を救うことと多数の人びとの霊と肉体に配慮することは別のことなのだ。一人で精進することと共住の修道院生活を行うことは別である。教権とツァーリ支配も別である。精進を行うことは何人とも争わない子羊となることに似ている。あるいは種を播くことも、刈ることも、集めて倉にしまいこむこともない鳥となることに似ている⁹³⁾。だが共住生活においては、たとえ僧らが世を捨てたととしても、種々調整し配慮する仕事は残っている。時には罰することも必要となる。もしこれを怠るならば、共住生活は崩壊してしまうであろう。これにたいし聖なる権威は怒りの感情、名声と名誉を求める心、着飾ること、人の上席につくことを控えるよう、言葉をもってまた十分な根拠にもとづいて、厳しく教えるよう要請する。それらは僧侶にはふさわしくないからだ。他方ツァーリの統治には、狡猾な極悪人どもの無分別を抑えるために、威嚇、抑圧、制御、絶対的禁止こそがふさわしい。精進生活と共住生活、教権と俗権のこの相違をよく弁えるべきである。はたしてツァーリが、一方の頬を打った者に他の頬をさし出す⁹⁴⁾のは正しいことであろうか。もちろんこれは最高の戒律である。だがツァーリ自身が名誉を軽んじたなら、いかにして帝国を治めることができようか。それは聖職者にはふさわしいことであろう。だから教権と俗権の相違をよく弁えるべきである。汝は世を捨てた僧侶たちの間にすら幾多の懲罰の例を見出すであろう。それは死罪であることはないが、きわめて重い罰である。もしそうであるならば、ツァーリが悪事を働く者どもを罰するのはまったく当然のことであろう。

だから汝らはどの町や地方にあろうとも、その地を支配しようなどとは望ま

93) マタイ 6 : 26

94) マタイ 5 : 39

ぬがよい。ルーシの各都市に都市長官や地方長官がいたとき、このような野望から何が起り、いかなる荒廃がもたらされたか、汝は己が無法の眼でよく見たであろう⁹⁵⁾。それがいかなるものであるか、汝は上記したことからよく理解できるであろう。これについては預言者が、「妻に支配される夫はわざわざいだ。多くの者に支配される都市はわざわざいだ」⁹⁶⁾と述べている。多数者の支配が婦人の無分別にいかかに似ているかを見たであろうか。もし「人びとが」一つの権力の下にないとしたら、いかに強く、勇敢で、賢くとも、彼らは無分別な婦人に似ている。一つの権力の下にない場合はのことである。なぜなら婦人は己の願うところをはっきりと決められずに、あれこれ迷うが、多数者も種々望むところを決めかねるからである。だから願望と理性が相反するのは、婦人の無分別に似ているというのである。以上にわたしは、汝が町に座して、ツァーリを蔑ろにし、自ら君臨しようとするのが、何の益ももたらさぬことを示した。これは分別を有する者なら、誰でも理解できるであろう。「いかに多くの財産すなわち黄金があろうとも、それに心を寄せてはならない」⁹⁷⁾とされていることを思い起すがよい。こう述べたのは誰であろうか⁹⁸⁾。ツァーリ権力を身に帯びた者ではなかったか。彼は黄金に縁がなかったであろうか。そうではない。ただ彼は黄金には心をとめず、常に神と軍事に精力を傾けたのである。ところが汝は癩病やみのゲハジに似ている⁹⁹⁾。というのも彼は黄金のために神の恩寵を裏切ったからであり、汝もまた黄金のためにキリスト教徒にたいして立ちあがったからである。使徒パウロは涙をながしながら次のように言っている。「犬どもを警戒しなさい。悪事を行う者どもを警戒しなさい。汝らに何度も話したように、今また涙をながしてキリストの十字架の敵のことを語ろう。彼らの神はその腹、彼らの栄光はその恥、彼らの思いは地上のことである。」¹⁰⁰⁾ はたして

95) 地方行政（いわゆるコルムレーニエ制）の弊害への言及。その混乱ぶりは雷帝幼少の頃、いわゆる「貴族支配期」（1538—43）に甚しかった。

96) イザヤ 3 : 12, ベン=シラ 25 : 24

97) 詩篇 62 : 10

98) ダビデである。

99) 列王紀下 5 : 20—27

100) ペリピ 3 : 2, 18—19

汝はキリストの十字架の敵と呼ばれずにすむであろうか。汝は名声と富のために、またこのうつろいやすき世の名誉を享受せんと欲して、永遠の未来を軽んじたのではなかったか。宣誓違反者の習いに従って己が祖先から裏切を学び、長年にわたり心のうちに悪事を企み、「わたしのパンを食べながら、その踵をわたしにあげ」、¹⁰¹⁾ 十字架の誓いを破り、キリスト教徒にたいし武器をもって立ちあがったのではなかったか。だが勝利をもたらす最強の武器であるキリストの十字架がわれらの神、キリストの力によって、汝らの敵となられんことを。

汝は一体何ゆえにこれらの裏切者を善意の者とよぶのであろうか。汝らの行ったことは、イスラエルにおいてギデオンの妻、というよりは妾の子アビメレクが行ったのと同様のことではなかったか¹⁰²⁾。すなわち裏切者どもは謀議を凝らし、偽りを内に秘めて、ある日ギデオンの正妻たちから生れた70人の子を打ち殺し、アビメレクを王位につけたのだが、汝らもまた己が邪まな、犬の如き裏切の習いによって玉座にふさわしきツァーリたちを抹殺し、妾の子ではないにせよ、玉座から遠い一門の子¹⁰³⁾をツァーリにしようと願っている。はたして汝らは善意の者、わがために生命を捨てる者であろうか。汝らはヘロデにも似て、わが乳呑児をおぞましき死によりこの世から奪い去り、見知らぬ者をツァーリとしようとしたのではなかったか¹⁰⁴⁾。それがわたしのために生命を捨て、善意を示すことなのだろうか。はたして汝らは己の子供にも卵のかわりにさそりを与え、魚のかわりに石を与えようとするだろうか。汝らはたとい悪人であっても、己の子供には良き贈物を与えることができるはずである¹⁰⁵⁾。ところが汝らは善

101) ヨハネ 13:18, 詩篇 41:9

102) 士師 8:30 以下第9章。

103) ウラジーミル・アンドレーエヴィチ・スタリツキー公のことである。イヴァン雷帝の従兄弟(父ヴァシーリー三世の弟アンドレイ・イヴァノヴィチ・スタリツキー公の子)である。

104) イヴァンの皇子ディミートリーは1553年6月生後わずか8ヶ月で亡くなった。皇帝一家がキリーロフ修道院に巡礼に出かけた際に、その帰路、川に落ちて溺死したとされている。ツァーリはこれをもクールプスキーの陰謀と考えたようである。「見知らぬ者」とはもちろん B. A. スタリツキー公のことである。注60) 及び103) を参照。

105) マタイ 7:9-11, ルカ 11:11-13。

意の義人と自称している。それならばなぜ汝らはわれらの子供にも、汝らの子供と同様に良き贈物を与えなかったのだろうか。それは汝らが己の先祖から裏切を学んだからだ。汝の祖父ミハイール・カラムィン公はアンドレイ・ウグリツキー公とともに、わが祖父、大君イヴァンにたいし裏切を企てたが¹⁰⁶⁾、汝の父ミハイール公もまた、[大君イヴァンの]孫のドミートリー大公とともに、今は亡きわが父、大君ヴァシーリーにたいし幾たびも殺害を企てたのである¹⁰⁷⁾。同様に汝の母の祖父、ヴァシーリー・トゥチコと[その兄弟]イヴァン・トゥチコも、わが祖父、大君イヴァンにたいし幾多の辱しめと非難の言葉を吐いた¹⁰⁸⁾。また汝の祖父ミハイール・トゥチコもわが母エレナ大公妃が亡くなった折に、われらの書記エリザール・ツィプチャーテフにむかって不遜な言葉をもって彼女のことを悪し様に語ったのであった¹⁰⁹⁾。汝は毒蛇の子であるから、このような毒を吐くのも当然である。汝はわたしが、悟りながらも逆らう者である、と己の悪魔の理性によって考えている。だが以上にわたしはその意味を十分に示した。汝はわたしの良心が癩病におかされていることを悟れ、とも書いている。だがわが国にそのような者がいるとは思わぬがよい。汝の父ミハイール公はたびたび迫害を蒙り、貧窮に陥いった。だが汝が犬のように行った如き裏切行為は一切働かなかったのだ。

汝はまた次のように書いてきた。「何ゆえにわれらはイスラエルの強者を滅ぼし、われらの敵を討つべく神がわれらに与え給うた軍司令官らを、様々な方法

106) アンドレイ・ウグリツキー公は雷帝の祖父イヴァン三世の弟。アンドレイ公とクールプスキーの祖父との関係は不明であるが、アンドレイ公とイヴァン三世とが不断の緊張関係にあったことはよく知られている。二人の対立関係は結局1491年、アンドレイ公の逮捕（2年後獄死）という事態に至る。

107) クールプスキーの父ミハイールについても詳細は不明である。ドミートリー公（イヴァン三世の最初の妻マリヤとの間にできた子イヴァン・イヴァノヴィチの子、すなわちイヴァン三世の孫）は1497年イヴァン三世よって大公位継承者として共同大公の位に即けられたが、5年後の1502年、母のエレナ公妃とともに捕えられた（のち1509年獄死）。代わって後継者となったのがイヴァン三世の二度目の妻ソフィアとの間の子ヴァシーリー（三世、イヴァン雷帝の父）である。

108) クールプスキーの母マリヤの祖父ヴァシーリー・トゥチコとその兄弟イヴァンの行動についても不詳。

109) クールプスキーの母方の祖父の言動もこれ以上のことは知られていない。

で死に至らしめたのか。何ゆえ神の教会において、彼らの聖なる勝利の血を流し、教会の敷居を殉教の血に染めたのか。何ゆえ汝のため生命を惜しまぬ善意の人びとにたいし、前代未聞の苦痛と死と迫害とを考え出し、正教徒にたいし裏切者、妖術使いその他不当な罪をきせたのか。」¹¹⁰⁾だがここでも汝は、己の父なる悪魔が教えた通り、虚偽を記しかつ語っている。キリストがこう述べられているからである。「汝らは自分の父、すなわち悪魔から出ており、汝らの父の欲望どおりを行おうとしている。彼は昔から人殺しであって、真理のうちに立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、彼は本音をはいている。彼は偽りであり、偽りの父だからだ。」¹¹¹⁾われらはイスラエルの強者を滅ぼしたことはなかったし、誰がイスラエル第一の強者であるかも知らない。というのもルーシの地は神の憐れみといとも浄き聖母の恵み、全聖人の祈りとわが両親の祝福により、そして最後にわれら自身、すなわちルーシ固有の君主によって治められているのであって、裁判官や軍司令官、州長官や指揮官によって治められているわけではないからだ。われらはまた己の軍司令官を様々な方法で死に至らしめもしなかった。確かにわれらの許には、神のおかげで多数の軍司令官がいるのであるが、それは汝ら裏切者を除いてのことである。いずれにせよわれらは自己の^{ホローフ}奴隷を恵むのも自由、処罰するのも自由であったのだ。

われらはまた神の教会でいかなる血をも流さなかった。聖なる勝利の血は現在のわが国にはまったく見られないし、われらもそれを知らない。教会の敷居について言えば、それはあらゆる装飾をほどこされ、神の教会も汝ら悪鬼どもの支配の後でわれらが行ったあらゆる善行によって光り輝いている。というのもわれらは知恵と力の限りを尽し、またわれらに仕える者たちもその務を十分に果したからである。敷居のみではない。説教壇も入口も立派に飾られている。それは万人の眼に、異邦人の眼にも明らかだ。われらは教会の敷居をいかなる血によっても染めはしなかった。信仰のための殉教者は今日わが国にはい

110) 上記116ページ。

111) ヨハネ 8 : 44

ない。もしわれらのために（姿を写すとあるがままに見え、離れるとその姿も消えてしまう鏡の如く）¹¹²⁾、偽わらず、誠実に生命を捨てる善意の人びと、すなわちあらゆる悪から自由で、われらに二心なく仕え、鏡の如く自分に委ねられた責務を忘れることのない者を、見出したとしたなら、われらは彼にあらゆる恩賞を十分に与えるであろう。それは口では善を言いながら、心では悪を企むような者ではなく、また人前では儉約し〔他人を〕称賛しながら、背後では浪費し誹謗するような者でもない。他方、これと逆の者であれば、すでに述べたように、その者は己の罪のゆえに罰を受けるであろう。他の国々において悪人にいかなる災難がふりかかってくるかは汝自身がよく知っているはずだ。そこではこのことは比べものにならないのだ！汝らは己が悪魔の習いにより裏切者が優遇されるよう命令を出した。だが他の国々では裏切者は優遇されずに処罰されているのだ。それにより国がしっかりと立つようになるためである。われらはまた何びとにたいしても、苦痛も迫害もいかなる形での死をも与えなかった。汝はまた裏切者と妖術使いにも言及した。だがあのような犬どもはどこであろうと処罰されているのだ。

汝はまたわれらが正教徒のことを何か誹謗したと言う。だがそれも汝が預言者の語る耳しいの毒蛇に似ているからだ。「耳しいのまむしは己の耳をふさぎ、呪文を唱えてお祓いをする者の声を聴かない。呪文を唱えお祓いをするのは賢者であるのに。それゆえ主は彼らの口の歯を砕き、獅子のきばをうち砕かれた」¹¹³⁾とされているのである。もしわたしが誹謗しているとするなら、他の誰が真実を顕わすというのであろうか。それとも汝の悪魔の策略どおりに、裏切者が何をしでかしても、彼らを摘発せずにおくべきだというのであろうか。一体何のために誹謗する必要があるのだろうか。己の下僕から権力やその貧弱なボロ服を得ようとしたことであらうか。それとも浅ましくも彼らの財産を奪わんがためにか。汝の知恵は笑うべきものではないか。兎を追うには何匹もの犬が必要だ。敵に対するには多くの軍勢が必要だ。一体何の必要があって、理性を

112) ヤコブ 1 : 23—24

113) 詩篇 58 : 4—6

有するわれらがいたずらに臣民を処刑するのだろうか。

さてすでに記したように、以下にわたしは若い時分から今日に至るまで、汝らからいかなる災難を蒙ってきたのかを詳しく書こうと思う。それは誰の眼にも明らかな事柄である。(たとえ汝が当時幼かったとしても、理解することはできるだろう。) 神の思し召しでわが父なる大君ヴァシーリーが緋袍の衣を天使の姿に変えて、この朽ちやすくうつろいやすい地上の王国を後にし、ツァーリのなかのツァーリ、主人のなかの主人の前に立つべく終りなきかの世、すなわち天国に入られたとき、わたしは唯一の兄弟、今は亡きゲオルギーとともに残された。当時わたしは3歳、弟は1歳であった。われらの母、信仰篤き皇妃エレーナはいとも哀れな寡婦となってしまった¹¹⁴⁾。それはあたかも四方から迫りくる炎に囲まれているかのようであった。あるいは周囲を取り囲む異邦人、すなわちリトワ人、ポーランド人、クリミア・タタール、アストラハン人、ノガイ人、カザンなどあらゆる異教徒から容赦なく攻撃され、あるいは汝ら裏切者からもありとあらゆる不幸と辛酸とをなめさせられたのであった。たとえば狂暴な犬である汝にも似て、セミョーン・ベリスキー公とイヴァン・リャツコイはリトワに逃亡してしまった。それから彼らが猛り狂って走り回らなかった所があるだろうか! 彼らは帝都へ、クリミアへ、そしてノガイへも走った。そしていたる所から正教徒にたいし戦いを挑んできたのであった。だがそれもすべて失敗に終わった¹¹⁵⁾。神といとも浄き聖母そして大いなる奇跡成就者らの執りなしによって、またわが両親の祈りと祝福とにより、これらはすべてかのアヒトベルの助言¹¹⁶⁾の如く、水泡に帰したのである。裏切者らはその後もわが叔父のアンドレイ・イヴァノヴィチ公をわれらにたいし立ちあがらせた。叔父は

114) 雷帝の父ヴァシーリー三世の歿年は1533年12月3日。雷帝の弟ゲオルギー(ユーリー)は当時まだ生れて間もなかった(1533年10月30日の誕生)。彼の歿年は1563年である。彼は聾啞者で、知能も低かった《простой умом》という。

115) С. ベリスキー公と侍従官 И. В. リャツコイは1534年ポーランド・リトワに亡命した。ベリスキーはポーランド王ジクムント一世に対ロシア戦争を働きかけ(1535年ポーランド軍はロシアに侵入した)、さらに帝都イスタンブールでスルタンと交渉し、1536年にはクリミア・トルコ軍とともにロシアに進軍した。

116) サムエル下17章、上述132ページ参照。

裏切者らとともにノヴゴロドへむかった。（汝はこれらの者たちをほめ称えている！われらのために生命を惜しまぬ善意の者というのだ！）そのとき多くの者がわれらの許を去り、叔父アンドレイ公の側についた¹¹⁷⁾。彼らを率いたのがセミョーン公の子でピョートル・ゴロフ・ロマーノヴィチ公の孫である汝の兄弟イヴァン公¹¹⁸⁾とその他多数の者たちであった。だが神の御加護により彼らの陰謀が成就しなかったのである！はたしてあれが汝の称える善意だったのだろうか。われらを滅ぼし、わが叔父を即位させようと願うことが、われらのために生命を擲つことであったのだろうか。あのあと彼らは裏切者の習いにより、わが世襲領地のラドゴシチ、スタロドゥプ、ゴーメリなどの町をわが敵国のリトワに渡そうとした。これも善行なのであろうか。彼らはこの国の一切を滅ぼし、その栄光を塵芥^{ちりあくた}に変えてしまおうとしたが、国中から仲間たちがいなくなるや、今度は異邦人と友誼を結び、ただただ跡かたもなく破壊することを願っているのである！

同様に神の御旨によりわれらの母、信仰篤き皇妃エレナも地上の王国から天上の王国に身罷られた¹¹⁹⁾。われらはかくて両親を失い、今は亡き弟ゲオルギーとともに孤児となった。われらは誰からも人間としての温かい保護を得られず、ただ神の憐れみといとも浄き聖母の御恵みにのみ頼り、全聖人の祈りとわが両親の祝福に希望をおいたのである。当時わたしは8歳になっていた。かくてわれらの臣民は支配者のいない帝国を手に入れるという願いを実現した¹²⁰⁾。彼らは己が君主であるわれらには一切の善意を示さず、富と栄光とを躍起になって求め、かくて互いに争い合うにいたった。それからどれだけの悪

117) アンドレイ・イヴァノヴィチ・スタリツキー公（ヴァシーリー三世の弟すなわち雷帝の叔父）の「陰謀」は1537年のことである。

118) イヴァン・セミョーノヴィチ・ヤロスラーフスキー公のスタリツキー公による陰謀への参加について伝える情報は他にはない。ここだけの記述である。雷帝はイヴァン公の遠い祖先ピョートル・ゴロフ・ロマーノヴィチ公（ヤロスラーフスキー公）の名を挙げているが、それによりイヴァン公とクールプスキーが縁者であることを示そうとしたのである。（ただし「兄弟」ではない。）

119) 1538年のことである。

120) いわゆる「貴族支配」《боярское правление》（1538—1543）の時代が始まったわけである。

事を働いたことであろうか。善意あふれるわが父の貴族たち、軍司令官らを一体何人殺害したことであろうか！彼らはわが叔父たちの居館と村落と所領を横領し、自らそこに落ちついてしまったのである！わが母の財宝も、彼らは猛り狂って足蹴にし槍で突きながら、国庫に移管してしまった。自ら分配し合った財宝も少なからずあったのである。これを行ったのは他ならぬ汝の祖父ミハイーロ・トゥチコであった。またヴァシーリーとイヴァンの両シューイスキー公が勝手にわたしの後見人となり、自ら君臨するに至った。彼らはわが父母に背いた主な裏切者らをすべて牢獄から解放し、己の側に引きよせた¹²¹⁾。ヴァシーリー・シューイスキー公はわが叔父アンドレイ公¹²²⁾の居館に住みつき、このユダヤ会堂の如くなった居館に、わが父とわれらの枢密会議の書記官フォードル・ミシューリンを捕えて連れ込み、恥辱を与えた上、殺害した。さらに彼らはイヴァン・フォードロヴィチ・ベリスキー公や他の大勢の者を処々に追放し、武器をとって教会に反逆し、府主教ダニールを退位させた上、幽閉してしまった¹²³⁾。このようにして彼らは己の欲望をことごとく実現し、自ら君臨し始めたのである。他方わたしとわが唯一人の兄弟、故ゲオルギーにたいする彼らの仕打はひどいものであった。彼らはわれらをあたかも異邦人か貧乏人の子でもあるかのように養い始めた。かくてわれらは着るものにも、飲食にも事欠くこととなった！万事においてわれらには自由がなかった。万事がわれらの意志に反して行われ、幼児期にふさわしいものではなかった。一つ思い出すことがある。幼少の時分われらが子供の遊びに興じていたとき、イヴァン・ヴァシーリエヴィチ・シューイスキー公はわれらの方をふり向くこともなく、長椅子に腰をおろし、足を腰掛けに伸ばし、わが父の寝台に肘をつけてよりかかっ

121) エレーナ歿後ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ及びイヴァン・ヴァシーリエヴィチ・シューイスキー公兄弟が実権を握り、エレーナ摂政時代に投獄されていたИ. Ф. ベリスキー、А. М. シューイスキー公などを釈放した。

122) アンドレイ・イヴァノヴィチ・スタリツキー公、上記注117)を参照。

123) 書記 Ф. ミシューリンの殺害は1538年10月のことである。イヴァン・フォードロヴィチ・ベリスキー公は一度釈放されたが、その後シューイスキー家とベリスキー家の対立が激化するや、再び投獄されてしまった(1538年秋)。府主教ダニールの追放は1539年のことである。後任の府主教はヨアサフである。

ていた。その様は親のようでもなく、逆に君主の如く威厳があるわけでもなく、無論奴隷のような素ぶりは一切見られなかった。このような不遜な態度を一体誰が耐えられるであろうか。わたしが幼少の頃に蒙った数多くのかくもみじめな苦痛をいかにして数えあげることができるであろうか。欲するときに食べられずに、遅れて食事したことが何度あったらう！わたしに遺された両親の財宝は一体どうなったのか。彼らはすべてを着服してしまった。狡猾にも小貴族ジェチ・ボヤールスキエにたいする俸給であるかのように言い立て、実際には賄賂として全額を彼らから捲きあげた。勤務に応じて俸給を与えることも、功績に応じて任命することもなかった。わが祖父と父の財宝を奪い、これを使って己のために金や銀の容器をつくらせ、表面には己の親の名前を彫りこませた。あたかも彼らの親の財産のように見せるためである。誰もが知っていることであるが、わが母の治世にイヴァン・シューイスキー公は緑色のムホヤール織の貂の毛皮外套を着ていた。毛皮はもうよれよれになっていた。もしそれが彼らの先祖代々の財宝であったとしたら、容器をつくる前にまずこの外套を交換して、最後に余った金で容器をつくらせるべきであったのだ。わが叔父たちの財宝についてはどう言ったらよいのであろうか。これも彼らはすべて横領した。その後彼らは各地の町や村に襲いかかり、乱暴の限りを尽くして住民を虐待し、その財産を容赦なく強奪した。彼らの隣人たちが蒙った損害は誰が数えあげられるだろうか。彼らはわが臣民をすべて己の奴隷とし、己の奴隷を高官となした。統治し秩序をもたらそうと思いながら、いたる所に不正と混乱をまき起し、誰であろうと法外な賄賂を要求し、万事賄賂次第で行いかつ意見を述べたのであった。

このような状況が何年も続いた。だが長ずるにつれてわたしは奴隷の権力に服従することを望まず、イヴァン・ヴァシーリエヴィチ・シューイスキー公を遠ざけ、代わってイヴァン・フョードロヴィチ・ベーリスキー公を側近に任命した¹²⁴⁾。ところがイヴァン・シューイスキー公は己が手勢を全員集めて忠誠を誓わせ、武装してモスクワに進撃してきた。また彼の腹心のクベンスキー諸公は彼が到着する以前に、わが貴族イヴァン・フョードロヴィチ・ベーリス

124) 1540年夏のことである。

キー公と他の貴族や士族を捕え、ペロオーゼロに追放し、殺害してしまった。また彼らは府主教ヨアサフをもその位から追って大いに辱しめた。同様にアンドレイ・シューイスキー公もその仲間とともにわが食堂に押し寄せ、猛り狂ってわが貴族フョードル・セミョーノヴィチ・ヴォロンツォーフを捕え、服を剥ぎとって辱しめたうえ、建物から引きずり出し、殺害しようとした。そこでわれらは彼らの許にマカーリー府主教とわが二人の貴族グリゴリー・モロゾフの子イヴァンとヴァシーリー兄弟を遣わし、彼を殺害しないように申し入れさせた。彼らはわれらの申し入れを不承不承聴きいれ、彼をコストロマーに追放した。だが彼らは府主教を押しつけ、彼のマントを飾帯とともにひき裂き、さらに貴族たちを突きとばした¹²⁵⁾。はたしてわが貴族とわれらに仕える者らをわが命令に反して捕え、殺害し、様々な苦痛や迫害を加えることが善意なのだろうか。軍勢を率いてわが国家を攻撃し、われらの眼前でユダヤ人の群よろしく「貴族を」捕えることが、われら、すなわち彼ら自身の君主のために喜んで生命を擲つことなのであろうか。奴隷が君主たるわれらと交渉し、君主が奴隷に懇願しなければならないのであろうか。それが軍人としての忠実なる奉公なのであろうか。もしそれが真理なら、全世界がそれを嘲笑うであろう。かつて加えられた迫害についてはもう語るべき言葉もない。わが母が亡くなってからその時までの6年半の間¹²⁶⁾、彼らの犯した悪事はかくの如きものであった！

さて15歳になったときわれらは自ら帝国の統治に着手した¹²⁷⁾。神の憐れみにより順調なる統治が始った。だが人は罪深い。彼らが絶えず神の恩寵に反した

125) シューイスキー家は1542年再び実権を握る。すなわち1542年1月イヴァン・ベリスキー公はペロオーゼロに流され、同年5月に殺害されてしまう。府主教ヨアサフも1542年に追放され、その後をマカーリーがついだ。若き雷帝の寵臣 Φ. C. ヴォロンツォーフのシューイスキー派による逮捕は1543年9月である。

126) シューイスキー家の支配は1543年末で終る(同年末イヴァン・ヴァシーリエヴィチ・シューイスキー公とアンドレイ・ミハイロヴィチ・シューイスキー公が処刑された)。雷帝はこの1538—1543年の6年余を「貴族支配」期と考えている。

127) 雷帝は1545年を親政開始期としているが、1547年までは実質上グリンスキー家(母エレナの生家)の支配が行われていた。

ので、神は怒りを顕わされた。帝都モスクワが火災で焼けおちてしまったのである¹²⁸⁾。われらの罪ゆえに神の怒りが増し加わったわけだ。そのとき汝が殉教者と呼んだ裏切者貴族らは（今のところ彼らの名前はふせておこう）、己が裏切に絶好の機会が到来したとばかりに、無分別な民衆を唆かし、次のように言った。すなわちわが母方の祖母アンナ・グリンスカヤ公妃¹²⁹⁾がその子供ら側近の者たちとともに人間の心臓をとり出し、妖術を使ってモスクワを焼き払った、そしてこの陰謀をわれらも承知していた、と。かくて民衆は裏切者たちの煽動に乗って、キリストのための大殉教者ドミトリー・サルンスキー教会の副祭壇において、ユダヤ人の輦みにならってわが貴族ユーリー・ヴァシーリエヴィチ・グリンスキー公¹³⁰⁾を叫び声をあげながら捕え、由緒あるいとも浄き聖母大寺院¹³¹⁾にひきずり込み、府主教座の前で無残にも打ち殺し、教会を血に染めてしまった。それから死体を教会の前扉からひきずり出し、犯罪人の死体でもあるかのように市場に捨ておいたのである。教会内のこの殺人のことは誰でもよく知っている。犬の如き汝が言う如くではなかったのだ！汝の言うことは偽りである。当時われらはわが領地のヴォロビエヴォ村にあったが、裏切者どもは民衆を唆かしてわれらをも殺害しようとした。われらがユーリー公の母、アンナ公妃と公の兄弟であるミハイール公を匿っているというのである。だがこのような主張は噴飯ものではなからうか。なぜわれらが自ら己の帝国に火を放たなければならぬのであろうか。実際わが父祖の祝福により相続された財産がどれほどこの火事で失われたことだろう。それらはどれもこの世界のどこにもない珍しいものばかりであった。一体下僕の仕業に腹を立てて己の財産に火を放つほど愚かで猛り狂う主人があるだろうか。たとえ下僕のものに火を放つことはあっても、己の財産は大切に保存するであらう。汝らの犬の如き裏切行為はことごとく暴露されている。それはあたかも果てしなく高い聖イヴァン教会〔の

128) 1547年6月のことである。

129) 雷帝の母エレナ・グリンスカヤの母。

130) エレナ・グリンスカヤの兄弟、イヴァン雷帝の伯父。

131) クレムリン内のウスペンスキー寺院。

鐘楼]¹³²⁾に水をふりかけようとするようなものではないか。汝らの愚かさはこのようにまったく明白だ！わが貴族や軍司令官たちはわが許しも得ずに、犬のように群れ集まり、われらに忠実な貴族ら、それもわが血縁の者らを殺害した。はたして彼らが善意をもってわれらに仕えるというのはこのことなのであろうか。常にわが霊をこの世からあの世に葬り去ろうと望むことが、われらのために己が生命を擲つことなのであろうか。彼らはわれらに律法を聖なるものとせよと命じながら、自らはわれらと同じ道を歩もうとは思わないのだ。犬よ、汝は驕り高ぶって何を誇っているのか。何ゆえ汝は他の裏切者の犬どもを勇敢な戦士と称えるのか。われらの主イエス・キリストは「もし国が内部で分れるなら、その国は立ち行かないだろう」¹³³⁾と述べている。国がもし内戦によって分裂しているなら、いかにして敵に断乎たる戦いを挑むことができようか。もし根が乾いているなら、どうして木が花をつけられよう。同様にもし国にあらかじめ秩序がうち立てられていなかったら、どのようにして戦場の勇気が発揮されるであろう。もし司令官が部隊をしっかりと組織していなかったら、彼は相手に勝利することはできず、むしろ敗れてしまうだろう。だが汝はこれをまったく無視し、ただ勇気を称えるだけで、勇気が一体何であるかについては無頓着である。だから汝は勇気を固めるよりは、むしろそれを砕いている。それゆえ汝はおよそ何の役にも立たない人間だ。家では裏切者、戦場においては判断力無き〔司令官〕だ。なぜなら内戦と不従順とをもって勇気を発揮せんとしているからだ。だがそれはできない相談だ。〔未完〕

132) クレムリン内の大鐘楼。いわゆる「大イヴァン（すなわちイヴァン・レストヴィチニク）の鐘楼」

133) マルコ 3 : 24